

YAMA GUTU

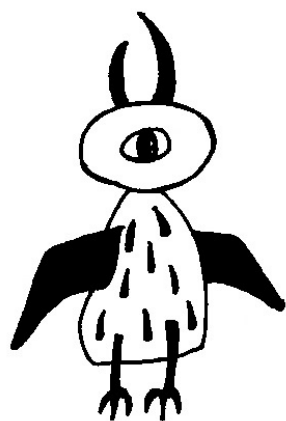


Vol. 16

S.W.V.O.B 会会報

1985 nen

つまや



第 16 号

—K

雨の夜

ひとり ベッドに 横たわる
窓の外は 暗幕を垂れたような 平らな夜だ
何の花だろう
甘い香りが 漂っている
こんな 暗い 薄っぺらな夜に
何を 願えと 言うのか

久しぶりに 梅雨空が 晴れ
鮮やかな 青空が 現れた
その時 思ったんだ
テレビも 映画もなく 地球が平らな時代に
人々の 頭上には いつも
壮大な スケールの 画面が あったことを

オリオンと さそりが 戦い、
年に一度の ロマンس があり
欲望や 野望 が 交錯し、ひしゃくが水をかける
様々な 色の雲は 形を変えて 通りすぎた

僕らが 山に 登るのも
その 鮮やかな 画面の 偶然性に
あこがれるからに 違いない

＊『やまぐつ』もくじ＊

雨の夜	—————	K
中央アルプスと温泉の旅	—————	諏訪部信一 …… P2
低迷山逍遙	—————	榎田 一典 …… P6
御座山山行奇談	—————	内山 正美 …… P18
筋右衛門漫遊記(三)	—————	骨友・筋右衛門…P26
転付峠～悪沢岳～小渋ノ湯	—————	川島 菊夫 …… P30
OB会スキーへ参加して	—————	諏訪部信一 …… P38
正月山行南アルプス編	—————	二瓶 祥 …… P39
街の灯へ向けて	—————	SHO …… P45
山の想ひ出	—————	平田 恵 …… P47
あうとどあのたきひ	—————	佐藤 通 …… P57
以たもの親子の大菩薩山行記	—————	嶋崎 三郎 智宏 P63
お月見山行	—————	江成 利一 …… P69
水上温泉ファミリースキー	—————	諏訪部信一 …… P70
「薬師から塘へ」	—————	小宮 豊 …… P73
南アルプス横断	—————	小澤 聡 …… P79
だれも書かなかった剣岳山行	—————	小宮 豊 …… P83
60年度S.W.V.O.B会総会	……………	P91
・行事報告・会計報告・役員一覧		
S.W.V.O.B会会員住所録	……………	P97

中央アルプスと温泉の旅

諏訪部信一

山登りをしたあとの温泉は最高な気分である。今回も子供を連れての山行であるため、登山終了後は温泉へ直行、のんびりしてから帰宅であった。参加メンバーは私の家族4人とちいちゃいおばあちゃんこと、千秋さんのおかあさんの5名である。59年9月23日、早朝橋本を出発。相模湖インターチェンジから中央道、諏訪南インターまでは走った経験があるが、それより西は今回が初めてである。途中で休憩と朝食を済ませ、10時近くに駒ヶ根インターチェンジへ到着、橋本からの所用時間は約3時間30分である。インターチェンジから案内表示板に誘導され、車をしらび平へとむける。しかし、しらび平への一般車の乗り入れは禁止で途中の駐車場へ車を置いて、そこからはバスでしらび平へ行くようになっている。上高地と同じシステムである。私達は一番奥と思われる駐車場まで行き、車を止め、着替えをして、バスに乗って、しらび平へとむかった。連休ということもあって、しらび平のロープウェイは約30分待ちの状態であった。しかし、時間が11時ということもあって、朝の混雑の一段落したところのようであった。ロープウェイで千畳敷カールへいっきに上がってしまう、カールは人も多いが紅葉がみごとで、少々天候が心配になり始めたが、それでも、ロープウェイ駅からの景色を楽しみながらの昼食であった。気温は予想よりも低く、子供達はさかんに寒がっていた。食後、いよいよ出発である。カールを横切り、登りにかかる。道は広く、足元もしっかりしているので子供達も一人でどんどん登ぼっていく。長女の様は自分のリュックサックをしょい、キャランシューズをはいて、一人前のスタイルでちいちゃいおばあちゃんと一緒にどんどんいくが、次女の茜はしばらく行くとグズグズ言い出した。すこしご機嫌を取りながら一緒にあるくが、一緒に歩くと、人の顔を見て、すぐに疲れたと言いだす。先頭に行く様との間もどんどん開

いてしまうので、しょうがなしに背中へおぶうこととした。背中 of しょうがいこに乗ったとたん、本人は大満足で、鼻歌まじりの気分である。それでも、2時間ほどで鞍部へ到着、そこからは小屋も目の前に見えるし、今日の予定を終了した気分である。梓は余裕しゃくしゃくでスキップで進むし、茜もやっと背中から降りて歩き出すという具合であった。心配していた天候もそのほどくずれるということもなく、無事小屋へ到着と私としては一安心であった。小屋へは出発前に宿泊を電話で予約してあったので、中へ入り、その旨を伝え、小屋の従業員は聞いてないとのこと。それまでは、順調に來たつもりであったが、ここでトラブルの発生である。もっとも、私のことであるから、従業員が宿泊の予約を聞いていようがいまいが私には関係のないことであるし、今日ここへ家族で宿泊することは事実である。更に、電話で予約したのは私本人であり、子供連れの為、個室が必要であればこそ予約したのである。そして、その連絡が上へ來ていないのは、小屋の内部の問題で、私にはいっさい関係がない。したがって、私としては、今日小屋へ個室を利用して宿泊ができれば問題はないので、そのように処理なさいとちいさな声を少し大きくしていったところ、小屋の人は非常にもの分かりがよく、すぐ隣の小屋の方へ案内してくれた。何か無理を言ったようで申し訳なかったが、小屋の人の好意でもあるので、割合に新しいその小屋へと入っていった。小屋の人は、最初、予約かどうかを聞かれた。個室で食事付きで予約済みであるが、隣の小屋でのことである旨を言ったところ、ちょっと聞いて來ると管理人は隣へ行ってしまい、約1時間近く帰ってこないのである。その間、次々に入ってくる登山者に待つて居るように説明し、まるで小屋の管理人である。それでも、ようやく管理人も帰り、良く意味も分かったらしかったが、部屋へはいるまで、ぶつぶつ言っていた。小屋は多少混でいたが、一番ひどかったのは、そこかは分からないが、市民登山のグループらしい団体が食堂の一画で宴会をやり、部屋へ帰ってからはゲームやら隠し芸、自己紹介を声高だかとやり、メンバーの親睦を計っていたことである。翌朝は非常によい天

気でホッと一安心である。小屋を出発し、木曾駒の頂上へ。360°の展望を楽しんで、記念写真を撮り、下山である。預けた荷物を小屋で受け取り、カールの頂上からカールの底へいっきに下っていく。帰りは、カールの中央を通り、散策をしながらロープウェー駅へと向かった。ここで、山ともお別れである。ロープウェーで下り、バスに乗って駐車場へ、着替をして出発。中央高速を名古屋へと向かう。恵那山トンネルを通り、中津川インターチェンジで高速を降り、中津川有料道路を通過、途中、木曾川の流れを見学したりしながら国道257を下呂町へ向かった。今日は9月24日、連休は今日で終わりであるが、我々は、もう一晚、温泉につかって、のんびりしてから帰ることとしていた。旅館の予約はしてなかったが、今日は大丈夫と言う自信があった。子供達をのせて、車の下呂の町に入り、国鉄の駅を捜すこととした。ほとんどの場合、駅に町の観光案内所があり、まずまずの旅館を世話してくれるものである。駅に到着する、すこし前から、我々の車の後に一台の乗用車がついてきていた。道が分からず、スピードを落とすと後もスピードをおとす。道はそれほど狭いというわけでもないのに、ずいぶん慎重なドライバーだなと思っていた。そして、駅へ到着。我々の車が止まり、ドアを開けて降りようすると、後の車も横へ止まり、運転手が慌てて降りてきて、開口一番、「今日のお泊まりはお決まりですか。」やっぱり、旅館の番頭さんである。観光案内所へ行こうとするのをおしとどめ、自分の旅館のピーアールである。こんな時、私はできるだけ無理を言うことにしている。安く、食事が豪華で、部屋が広くて、きれいなことが条件である。しばらく話をしてから、案内所へ行こうとすると、駅にいた、外の客引きさんが、「あの人は社長だから気にいったなら泊まってあげなさいよ。」と言うので、今回はそこへ宿泊することに決定。社長の案内で旅館へ到着。仲居頭と玄関で話をし、仲居頭は最初不服そうだったが、社長の連れて来たお客である為、こちらの条件ですべてOKと言うことになり、部屋へ案内してもらった。旅館の前が消防署で夕方の点呼が賑やかに聞こえてくるが、何かの時には心強いはず

で、旅館専属の消防署と言う感じである。食事は連休の後と言うこともあって、非常に豪華であったが、食後、町へ出かけて行ったのはよいが、観光客が少ないせいか、どこも休みで期待していた子供達はがっかりであった。翌日、下呂温泉にある、観光村を見学し、国道41号を南下、犬山市でモンキーセンターを見学、小牧インターチェンジをへて、東名高速へ、懐かしのわが家到着は深夜であった。

低迷山逍遙

榎田 一典

前回から始めたこのシリーズ、我ながら好企画だなあ、と自負している。書き易いんだもん。カレンダーの赤印に従う休日で行ける山、すなわちアプロイ午や実動時間が短く、それでいて意外と高く、それなりに趣き（山容や眺望、動植物）があり、かつ静かである山。そんな気の利いた山を求めて地図やガイドブックとにらめっこをするのも楽しいものである。

実動時間を縮めるために、できるだけ車で林道を追求する。

学生の頃は「こんな所まで車で来なくてもいいじゃんか。」と憤りを感じてばかりいたのに、立場がかわれば人間なんて、コロコロと変わってしまうものである。一種の後ろめたさは車で登山者を追い越す時に、砂ぼこりをたてぬよう、会釈をするように心がけることで解消している。

前回の小檜山（奥秩父前衛）茅ヶ岳（ニセハヶ岳）・蛭ヶ岳（丹沢）に引き続き、三つほど僕なりの山を紹介する。一人で

ブラッとしたくなつた時、ファ
ミリー登山に、お月見やお花見
などの宴会登山の参考になれば
幸いです。

へその4✓

御座山おくら（ニニニートン）

「御座山に行こうよ。」どこ
にあるの？その山。「エートね
金峰より北側でハヶ岳より東で
妙義・荒船より南で、両神より
西だよ。」アルプスにも奥秩父に
も上越にも属さない、盲点に、
大きく高くそびえているのが御
座山である。アルパインガイド

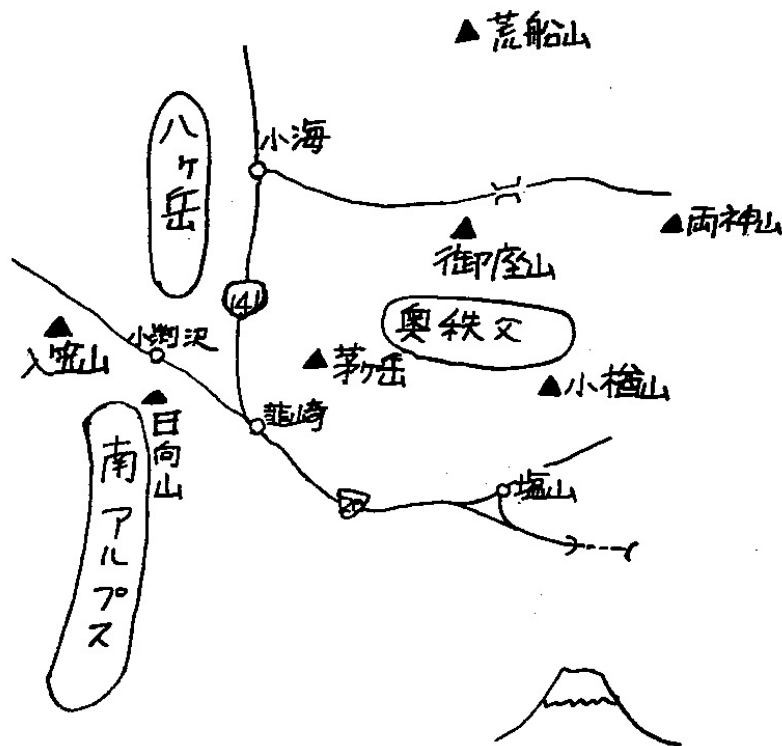
では「北関東（西上州）」と位
置づけられている。この盲点の
静かな山を、故深田久弥氏は、
「避衆登山」なんて呼んで登っ
ている。避暑、避寒があるんだ
から人混みを避けるってのがあ
っても良いだろうということだ。
なぜかこのシリーズには切り
離せなくなった中里と、最近デ
ビューした内山と三人で出かけ
た。秋分の日の日連休である。

中央高速を須玉で降り、を
北上して小海で右折、信州と上
州を分ける山脈へ向かう。秩父
困民党の怨念がこもる小さな集

落が夜の闇の中、現われては消え、また現われては消える。変なことばかり知っている内山の話（幻の国道―峠の茶屋）など聞くうち、車の中が**コワイ**雰囲気になっってしまった。人数を数えると一人多いような……。後ろを振り返るのが怖いような……。誰かが唾を飲みこむ音。そう、秩父の夜はこわいのであった。皆さんにも経験ありませんか？

白岩という部落より、細いが舗装してある林道に入る。四キロメートル程で終点となり、車五、六台のスペースがある。我

らは水を持っきておらず、地図にある沢は見当たらず、しょうがなく僕が見つけてくることに



なつてしまつた。白岩の部落まで戻り、あちこち走りまわるがトイレもなく家々は雨戸をピタリと締めて物音一つしない。それもそのはず真夜中である。僕だけが乗り遅れてしまったかのようにボツンと取り残されていた。『どうしよう……意外と大きな問題であつた。今夜の酒、明日の水。』

意を決して、僕は目の前の相木川に注ぐ沢を調べ始めた。三本調べて上流に一軒しか家のない沢が一番きれいそうなので、石垣の上から沢にとび降りた。

満タンにして戻ろうとすると……石垣が意外に高いのである。ブロックなのですべって足がかりがない。シ——ン。(沈黙)

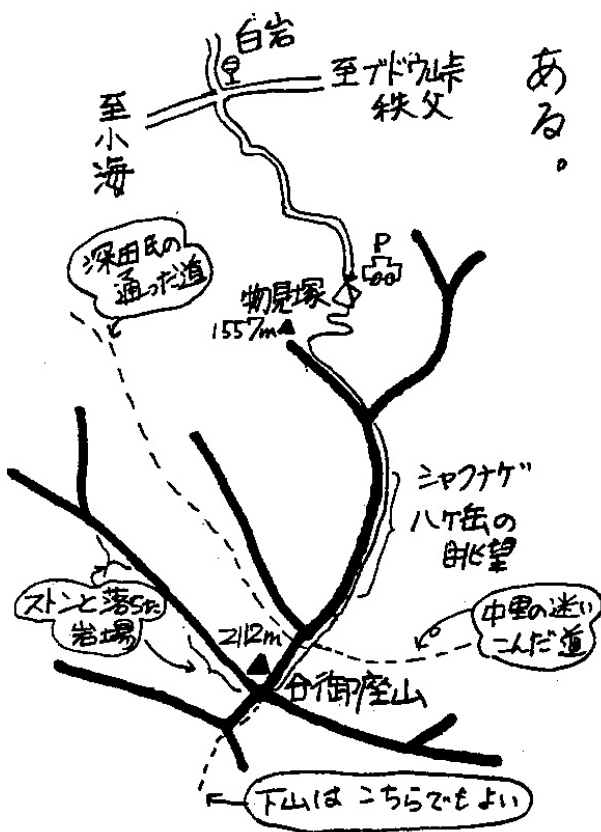
一刻も早くテントに行きたいのに、**コワイ**のに、どうしてこんなことで、こんな所で一人シンとならなくてはいけないのか。あせっている場合ではない。現実的な問題である。声を出して助けを呼ぶか？ いやそんなことはできない。だいいち村の人に見つけられたら、このシチュエーションを何と説明する。今ほとにかく、誰にも見られずに、さ

も何事もなかったかのように、
この場から立ち去らねばならな
いのだ。僕はポリタンを持った
まま忍者のごとく沢をさまよい
石垣にへばりつき、ウルトラマ
ンのフラッシュビームを取る根
性ではい上がったのである。

そんな悪戦苦闘もつゆ知らず
中里達は「カーラジオの音がや
けにでかいスね。恐かったんで
しょう。」などとぬかしておった。
オロカモノめ。

翌朝は、前夜の悪夢が嘘のよ
うな秋晴れであった。まわりは
高原野菜の段々畑であった。一

汗で物見塚の肩まで。樹々の間
から御座山が見える。奥秩父特
有の山の古さを体中に感じなが
ら高度を上げてゆく。シヤウナ
ゲの木が多くなってくると、岩
稜となり、ハケ岳が大きく座っ
ている。山口坂から倒木の間に
一気に登りつめればもう山頂で
ある。



林道終点より二時間半。高度差約600メートル。道もしっかりしているし、そんなに険しくもない。車+ワンデイ・ハイクにちやうど良い。そしてこの展望。富士山から始まって日本アルプス、ハケ岳、奥秩父、浅間山、両神や妙義・荒船、眼下の男山天狗山。同じ日に倉地さんは両神山からここを眺めていたというからおもしろいものだ。あまりの感激に中里は放尿してしました。約50メートルの落差で、黄金の水滴が散り、気がつけば中里の背中に二枚の羽が現われて

いた。僕は「天使の放尿」と名づけてやった。



下山ルートは南下して上栗生へ行くのが一般的であるが、我々は車までジョギングで引き返し、ブドウ峠を越えて整備され

た秩父路を走って帰ってきた。

※中里は下山途中、山口坂の下から道をまちがい、一時はど
うなるか心配させた。ぎっと放
尿のばちがあたったのだらう。

参照—五万図「十石峠」

アルペンガイド

「最新ハイキング・北関東」

へその5✓

日向山ひなた（一六六〇メートル）

甲斐駒・黒戸尾根の登山口竹
宇から尾白林道を直進する。林
道は整備不良で、オフロードバ
イクやジムニーなどなら心配な
いが、ふつうの乗用車に大の男
三人（倉地さん、江成さん、榎
田）が乗ると、底をするのは覚
悟せねばなるまい。ましてピッ
カピカのブルーバードSSSターボ
では嫁入り前の娘である。早々
に娘を捨てて歩き出した大の男
三人であつた。



10月の日曜日
 天気晴れ。こ
 んなに良い日
 なのに不思議
 なくらい暇な
 男三人が集ま
 た。それがま
 た、やけにおか
 しい。素敵
 山の仲間だ。

歩く、いや登る時間なんて、
 一時間余りしかないのである。
 でもこの日向山の呼びものは、
 雁礫（がんがわら）の眺めなの

である。樹林帯を黙々と歩き続
 けたうっぶんを一拳にフリアー
 してくれるのである。「ああ！
 いい加減あきらめたなあ。――
 わあっ、な、なんだこの眺めは、
 す、すごい。」

燕岳^{マツダ}真青の花崗岩のモチーフ。
 切れ落ちた砂原。傾いたハケ岳。
 釜無断層崖と広い空。

真白な砂原に腰を降ろし、景
 観を楽しんだ後は、ジャーン、
 ビール、アシツ。ジャーン、焼
 き鳥、ふもとのお店で買ってき
 たんだもんね。

残念ながら、甲斐駒は近すぎ

ることと、南側があまりひらけてないので、迫力不足であるが、一時間余りのアルバイトでこれだけの要素を持つ山もめずらしいだろう。

ちょうとしたワンデイ・ハイ
クにはうってつけの山ですね。

参照―五万図「韭崎」

アルパイン・ガイド
「南アルプス」

へその6

にゅうがこやま

入笠山 (一九五五～)

僕には変な癖がある。自分でも時々いやになるが、なおそうとはしない。なぜならその癖で損をしたことがないからだ。他人のやっていることが非常に良Hさそうに見えてしまうのである。たとえば、明治時代の小説など読んでいて「そこで私は遅めの昼食をとり……」なんて書いてあったりしただけで、もう唾がたまってしまったりするのである。たぶんお茶漬けか何かを食

べただけなのだろうが、さぞ豪華な昼食なんだと勝手に思いこんでしまう。テレビの旅の番組で紹介された所に勇んで出かけても、全然おもしろくなかったなんてことは度々である。

入笠山に行こうと思ったのも、山溪の「小林泰彦の低山再会」で見たからである。「中部山岳がほとんど丸見え」というキャッチフレーズだったから、心はもう勝手に槍や穂高や甲斐駒の雄大な眺めを期待していたのである。カヤトの原もきれいなそうだし、よし、コーヒーなん

かもわかしたらムードが出るな、ついでにカツアライメンも食べよう、あ、そうそう双眼鏡も忘れずにね。

十一月の末の日曜日。雨。でも標高があるから雲の上なんてこともあるかも。

ほとんど車で登れてしまうのである。中央高速を小沢沢でおりて²⁰から標識の通りである。

林道はダートである。

着いた所も土砂降り強風、なにか穂高だコーヒーだ。最悪の気分になり、帰ろうと思ったのだが、人なんて誰もいないよう

だったマヌスル山荘に誰かいた。
（付近には三軒山小屋がある）
やってるのかなあ、と思つての
ぞいたら、そこにはダルマスト
ーブが優雅に燃え、一人のおば
さんが編み物をしていた。

ストーブにあたり、コーヒー
をいれてもらつて、三時間近く
も話しこんでしまった。天気の
良い日曜ならもつと混むんだそ
うだが、これだけひどい天気だ
から静かな山小屋で、くつろぐ
ことができた。おばさんが話し
てくれる四季折々の景色や山小
屋のこと、子どものこと、どれ

もこれも皆、ひどい天気のおか
げだ。特に中央アルプスの眺め
がいいようだ。それから天体の
観測に条件が良いそうで、専門
家がやって来たり、また山小屋
にも観測所と望遠鏡がセットさ
れている。冬にはトバー・リフ
トのみの小スキーゲレンデもで
きる。

再び来ることを誓つて別れた。

参照

五万図「高遠」

アルパイン・ガイド

「南アルプス」

ジャックのことは

にってるよね〜!?

松田H郎とエカワ

川 鳥 と 北天佑

泉さん と 関口宏

黙っている

ニハイ と

笑った

松田優作

小宮さんと 細川たかし

平田さんと 畑中葉子

沢井 と とんねるずの
背の高い方

江成さんと アルフィーの
ベース

中里と さかさき
こうのすけ

中里と ゴンタ2号

中里と 森永エンゼル

佐藤さんと 佐藤さんの
妹さん

まねできる?

小宮さんの
ゾウさん 歩き

倉地さんの
ET 歩き

秋山さんの
2拍子の性格

小宮さんの
6/8 拍子の性格

提案

OB会で ニハイ人形を
作って 売り出したらどうか



格言

「大は小をかねる」— ニハイ

御座山 山行奇談

内山正美

昭和59年9月23日&24日、山に行った。

もう半年以上も前の話なので、ほとんど忘れかけているが、確かに自分はず山に行っていた。

御座山という、初めて名を聞く山だった。

いいお天気だった。

榎田さんの話によれば、OB会でもたれも行っていない山だということだった。

きつとんでもない山だ。と素直に思った。榎田さんからの電話がきた時に、自分はずそう思った。とんでもない。

中里も一緒に行くという。彼と山に行くのは、現役以来の出来事だ。おもしろそうだ。まあすごい。

ハ、ミカ変ると存じたかううれしい今日この頃だ。

みなさんこんにちは。内山です。

私、本来主役のです。もうふさげるのはやめましょう。

と、いうわけで、出発の、ほんの二、三日前に、榎田さんより山行計画の電話をいただいたのです。

さて当日の午後、例のミカとく、榎田さんの白いジエミニに乗って、三人は出発したのです。

途中、榎田さんのクラスの一児童の絵日記の話を聞いたのですが、あまりにも楽しい話だったので、こゝを書けば、

原稿の大半かうまるのですが、あの二瓶が、既に書いてしまった。

というゆえさがありますので、おしまふつも、はぶきます。

中央ハイウェイを降りて、美しい清里をぬけて、小海線に沿って、車は一路御座山へと向ってまいります。

海尻の駅の裏手に入ると、雰囲気が出てきます。

そのうちに、あたりはもう秩父で、自分は、秩父が、
いつでも気味悪く感じられ、そのくせけっ、こう大好きで、
このまぼろしの国道と呼ばれる、299号線の話思い出して
しまったわけで、思い出してしまうと、この恐怖を自分の
ものだけにしてしまうのは、とても惜しく、みんなで楽しく
恐怖をわかちあったのです。

その恐怖はこういう話です。



自分の学校の心理学の助教授が、前にこの道を友人と走って
いて、道にまよってしまった、たまたま茶店があったので
そのおばあさんに道をたずねると、心よく教えてくれて、
気分よく、教えられた道を走っていくと、登り坂で、なぜか
その時、変な予感がして、車を降りて、その坂の頂上にいくと
頂上をすべたあたりで、ぽつりとアスファルトが切れ、
いわゆるジャリが、その先の河に落ち、そこをいって、危うく、

車ごと、タイピニグで、とんでもないばあさんだとひきかえ
してみると、まちがいなくあったはずの場所に、あ、たはずの
茶店がなく、当然いたはずのあばあさんもいなくて、ぞつと
してしまつたという、ぞつとした話で、ぞつとした。

これで雰囲気も倍増した。これが後に、榎田さんの身に
こういう形でふりかかつたのは、これは後の話なのです。

期待のうちに、話を進めますと、車はどうか道に迷いたか
らも幕管地たるふもとの空き地へと着いたわけで、そこで、
はたと氷をくんでこなかつたということに気づいて、あわてた
わけだ。そのうち榎田さんか、一人で車でくみに行くという
実に劃期的な意見に落ちつき、我々は平和のうちにタニロツプ
のテニスを広げたわけで、その間に、榎田さんか、どんな恐い
目にあつたかなんてことは、つゆ知らず、我々は平和だった。
星に手かるときそうだななどと夜空を見あげながら、中里と



つれいふんをしました。

一時間近くして、榎田さんかもしど、どきた。も、かすると
その山以上かもしれない、なにしているこ、ちは気事なもので
時間的感覚などはたか、たので忘れしました。

水を求めてさすま、た榎田さんは、とうとう林道の入口の
人家のある方まで行って、橋の下に降りて、水をくんだは
いいけど、今度は、道の上まで上るに上らず、かたう努力の末
水をくんできたということ、ああ恐ろしい、なんて水は
こわいのだらう。

水害にあった榎田さんかもしど、たので、さっそくり金をとった。
Eしか榎田さん購入によるお弁当だったよう、気がする外、
字かではない。その後は当然酒である。焼酎と中里のもって
きた、濃縮ライムにする、単なる焼酎のライムジュース割りです。

榎田さんは、自分でくんできた水を、煮沸なしには飲みたくないなどと、一応言ったか飲んだ。ほんとはよく飲んだ。



ここまで読みかえしてみても、どうとかますとか、そういう誘惑がそろそろいなくて読みにくいのだが、気にしないで下さい。

それに前おきかなくて、なかなか山に登りはじめないと思います。思いまするが、なにしろ山頂まで二時間ぐらいの山行ということ、すみません。

ところで、ライムは水だけでいいかった。

さて、やっと登りはじめる予定の朝が来、てきて、車をあいた所は、記憶にたよれば1500mぐらいの所で、いわゆるすぐに頂上で、登山道を登っていくと、眼下には、段々畑が見え、その中の道の行きどまりの草原に車が見えたわけです。

あ、というまに山頂です。もともと二時間そこそこです。ディパックにも、昼食くらいしか入ってないのですから、

そんなもんです。その分、秋を待中に感じました。

山頂の手前には、小屋がありました。中はけっ、こう広くて、落書ノートみたいのもありました。ばらばらとめくっても、当然の口会ひ人はいないわけで、みんなで納得しました。

山頂からは、天気もよいせいか、360°の大パノラマで、

特に、いわゆるハリ岳を見るには最もよい場所であることは、十分にうなづけ。すごいすごい。ちなみに、先日（60年5月5日）の赤岳付近からは天気が悪いせいでもないのだが、おぐら山が遠くに見えた。

頂上には大きな石がごろごろしていて、石壁もあつたりして、そこを一時間程、ひるねをした。

既にあつくはなく、かといって、またまたさむくもなく、ひるねにはもってこいの、最も贅沢なひるねのための、日和で。

中里は中里で、山頂の石の上から、垂直な崖下にもかつて、

最も贅沢な放尿をした。

美しい放物線を描いて、それは下界へと放たれた。(写真あり)
帰途、中里が突然消えた。再び、御座山の怪である。

最後尾、というところまで人目だが、そこにはいたはずの彼が、
いつのまにかいなくなった。単に道に迷っただけだった。
後をす。ている間、やたらでかいアリニコつおいた。

自分かアリニコつと遊んでいると、中里はハラハラしてやつてきた。
車の所にもどり、林道を横断し、埼玉に入って、秩父、青森
を通って帰路にいった。



でかい
アリニコつの
実物大



なかむとくん
たちしんの国

筋右衛門漫遊記 (三)

骨皮筋右衛門

スイス放浪

スイスには「ホリデーパス」という国内全域の周遊券がある。八日間鉄道・バスが乗り放題というものだ。その当時九〇S.F.(スイスフラン)で、二四ドル(US)と七二〇〇円と耐え旅行の我が身には、かなりまともな出費であった。けれどもこの周遊券のおかげで、極めて能率良く全域を回れた。スイスと、後に訪れるアメリカは一国をよく回ったと思う。そのアメリカもグレイハウンドの国内バス周遊券を利用してため、きわめて安価で能率的だったのだ。あの広大なアメリカを二十一日間乗り放題で九九ドル(約三〇〇〇円)だったのだから。もっともスイスの旅に出たのは、一九七二年八月五日だからもう一三年前の物語である。一US\$＝三〇八円で固定していた時代である。

バーゼル(Basel)から首都ベルンを通りチューン(Thun)へ列車で入った。バーゼルはドイツ・フランスの国境近く、まだ平地だが、走るにしたがって山が深くなり、ここはツーン湖に面した山間の保養地である。ここから湖水船に乗ってインターラーケン(Interlaken)に着く。インターラーケンからのじかには登山鉄道でグリンデルワルト(Grindelwald)のY.H.に着いた。そこはもうすっかりススであった。湖水から眺めた古城のたすまい。万葉雪を戴く峰の連なり。ドイツまでの土臭い旅からの急激な変化で、心と体がこのメルヘンの国に惑いを覚えていた。今は八月。湖水の保養地は老人の姿が目立ち、観光地はカメラを持つ旅行者で賑わっている。自分もそんな旅行者の一人——少々はみだしているが——なのだ。

翌日、丹崖高い(往復五三フラン)地中ケーブルでアイガー中腹の展望台へ登る。「アイガーサンクショーン」に出でくる登山鉄道で、岩山をくり抜いて昇りゆく。スイスの観光地だけあって、ここからの眺めはすばらしい。ユングフラウ他は山々が青い空に白く輝き、眼下には大きな氷湖が大蛇のようにうねっている。ここからはメンヒの登山口になっているらしく、展望台を離れて、雲道を登っていく。足が登山の感覚を思い出して、心ははすんでくる。が、軽登山靴のようでは足元がおぼつかない。ビッセル・アイゼンで身を固めた登山者が下りて来る。僕におかてフランス語で何が注意する。言葉はわからないが、言わんとすることは理解できる。で、写真を撮るか撮り、早々に下ることにした。

インターラーケンへ戻り、マイリンゲン(Meyringen)のY.H.へころがりこむ。客は少く、遺物・設備はホテルなみの立派なホテルに満足するほどにこの国の豊かさを見るおもしろいであった。翌日はルツェルン(Luzern)から船でブルネン(Brunnen)、そしてフリーレンへ。ここまで来て今日は峠越えのバスがもうないという。ホテルは高くて右れない。困っていると、バス案内所の人ギャンツ場へ連れていってくれて、パンカローを紹介してくれた。五三Fは高いので野宿すると言ったら、彼女はあきれていた。おれに日本の絵葉書をプレゼントする。親切で美しい人にはすぐにあげてしまうので、残り少なくなってしまう。困ったことだ。満天の星を眺めながらの野宿もいいが、高地なので寒いはまいた。

翌日クラウゼン・パス(Klausen Pass)をバスで越え、リンサルへ。ここからは電氣機関車を四回乗り継ぎ、夜の九時ごろサンモリツ(St. Moritz)に着いた。翌日サンモリツからロカルノ(Locarno)へ。カッパリよりのろい電車でイタリアのドモドンラへ。ここでもまた夜にはなりました。観光客の通らないコースを選んだために、移動にはひどく難儀しましたが、ロカルノもまた旅の味わい一つであろう。街を歩いて守宿を見つめる。夕食付一泊一七〇〇リラ(九〇〇円)だから安い。スイスではこうはいかない。

最低でも素直りで二万円以上である。物価もそうだが、スイスとイタリアでは生活のギャップも大きい。スイスではどんな田舎でもすばらしい家となく整った庭。そして自家用車と完璧に舗装された道が続いている。そして今、国境という見えない線を越えた、このイタリアの谷間の小さな街はどうか。古びたレンガ作りの家が寄り合い、石畳の裏通りでは洗濯物の間で子供が遊んでいる。このホテルもそんな中にある民宿と駅前旅館を兼ねたような宿なのだ。夕食は家族と同じものである。日本なら、「予約ではない」と、あじくありあわせで済ませるね。しほじと言ったところだろうが、このおみさんは違ふ。でん、と食卓に料理とパンとスープを置いて、「口に合わないから外行で食べたいで、しほじという顔で日本人だろうが気にしない。僕はそんなことを考えたら、無精に嬉しくなってしまうのだ。出されたものはすべてペロリと平らげた。」「スープとパンならまだあるよ、しほじというセニョーラの言葉に、遠慮もせずに、すかさず「グッラッエ」しよった。

翌日ツェルマットへの列車の中で考えた。僕の旅は西ヨーロッパの清契感や、スイスの美しさ、豊かさをだけであって、何かサテスファクションが得られないのではないかと。スイスは美しい。それはそれで良いし、「百聞は一見に……」でもある。しかし、もし今、このまま旅を打ち切って日本へ戻ったら、僕の心は消化不良の胃袋みたいにすきりしないだろう。だから、そのためには、と考え練けた。そして、「そのため」の手段としての構想が大きく膨らんでゆくことになる。

ツェルマット (Zermatt) の下には積雪であった。ホテルはべらぼうに高い。絵葉書のような街を、タクシーがわりの馬車が金持ちの老夫婦を乗せて通り過ぎる。ショーウィンドーは美しく飾り立てられてお客を待っている。とても野宿の寒風ではない。あきらめて他の町へ行くことを考えているところへ、ドイツ人のヒッチハイカーが嬉しい情報を提供してくれた。街外れに「Nice Hotel for us」

があるという。これから行くが、一緒にゆくかと言うので喜んで同行する。なにしろ無料だということだから。着いてみればそれは蒸屋であつた。しかし、それは右るには十分で、日本のどこかの山小屋より立派である。すでに先客が五、六人おり、寝袋を広げて、スペースを確保している。国籍はイギリス・アメリカ・ベルギーと国際色豊かだ。すぐに仲良くなり、英語でべらべらしゃべり出す彼らを見て

いると、他国人という意識が、日本人と韓国人の間は、りず。と少ないのにうらやましくなってしまう。そして英語、というより英会話力は何よりも大切な情報というものを得る源泉だ。それを彼らは我々日本人よりずっと多く持っている。加えて西ヨーロッパではパスポートさえ持ていけば、国



境など無きに等しいのだ。こういう情報によってこの空家へハイカーが集まってくる。家の前に誰か書いたか、看板がかかっている。『Peg's Hotel』と書かれている。さしずめ『人民ホテル』といった気持ちでめらわれているのだろう。

翌日もすばらしい抜けるような空である。ホテルを出て、しばらく登ると、眼の前にマターホルンの鋭く上がった山容がどんと構えてそびえている。振り返ればゆるやかな谷間にシェルマットの町がこじんまりとまとって美しい。山道に添って羊が草を食んでいる。マターホルンの麓までロープウェイがかかっているが、これを使わず、登山道をとって登ろうという訳だ。約四時間程で終点まで気持ちの良い登りであった。ここまで登ると、すぐ眼の前に岩肌が起つてきて、マターホルンの威容が心に突きささってくる。傾斜度はかなりきつく、稜線はナイフリッジに近いくように見える。頂上に立つのは容易ではなさそうだ。岩屋の世界だ。ちなみに当時でガイド料が一人、一五〇〇ニ。〇。〇。〇。下とか聞いた。ロジ風のホテルのテラスで食事を取り、再び歩いて下る。はさしづりに登山気分を味わった一日だった。

その日はピュルズホルムへ再会し、翌日は間蘆葦の最終日なのでジュネーブ(の近所)へ列車で向う。現代と中世が違和感なく解け合っているレマン湖畔の都会。それがジュネーブの印象だ。古い教会や歴史博物館を訪れて、バーゼルへ戻った。

もちろん、上面を撫でただけの八日間であった。それでも惹ける物はある。この国の隅々までゆきといた豊かさである。この豊かさはどこから来ているのか。それはやはり観光収入であろう。この国は、自然が与えてくれた恵みを十分受け入れて、それを保護するあらゆる措置がとられている。自然と調和しない建築や、その色の制限、屋外広告の規制。ブロック塀のような無粋なものはいくにも見られない。観光立国としては実に恵まれ、そして成功していると思う。そして、故に、外面だけが見られない一旅行者である僕にはとてすばらしい国であり、また一方、地べたを這

うような旅人の僕にとては奥みがなく、食べ物のない国なのだ。

パリへ

朝から雨。ムルハウス(Mulhouse)まで列車で出て、ヒッチを開始する。途中ディジョン(Dijon)という大きな町で二泊し、パリへは二日で着いた。

紹介された南さんの下宿で岸田と暮り合う。岸田はもう四日も前に着いていたとのこと、待たせてしまった。その日から下宿にぐちゃぐちゃになり、パリ市内を歩いて歩いた。凱旋門、近代美術館、セーヌ河畔、シテ島とノートルダム寺院、モンマルトル、ルーブル、そして少し離れてベルサイユ宮殿にも出かけた。僕には芸術家の眼覚はないが、歴史の匂いは感られる。かなり観光化された匂いであるが。

それではパリのすばらしさを語ろう——なびとは実はおもてでない。パリは美しいとは思ったが、特に感懐は残っていないのだ。どうもパリにいた時は落ちこんでいたらしい。ニナオの青春のペンがこんなことを書いている。書くことにより自分自身に言い聞かせ、叱咤激励し、落ち込んでいた自分から抜け出そうとしている様がよくわかるのだ。

「毎日動き回るのは比べ、一ヶ所に滞ることは肉体的にも精神的にも重要なことだ。精神的な安定が、体にも影響してくる。人の一生がもしずっと動き回る旅だったら、体も精神もまいてしまふ。人は年をとるにつれて無理がきかなくなる。そして人の心もまた、いつまでも枚原の旅を続けていることはできないのだ。心の落ち着き、平気は個人差がある。自分の心も今、不安定の中にある。その不安定をかもしだす一番の要因は若さにある。若さが今こうして旅をさせている。この若さを大切なものと思うなら、今の不安定から逃げずに、がっぷりと四ッに組み、そして味わおう。たとえそれが苦くても。」

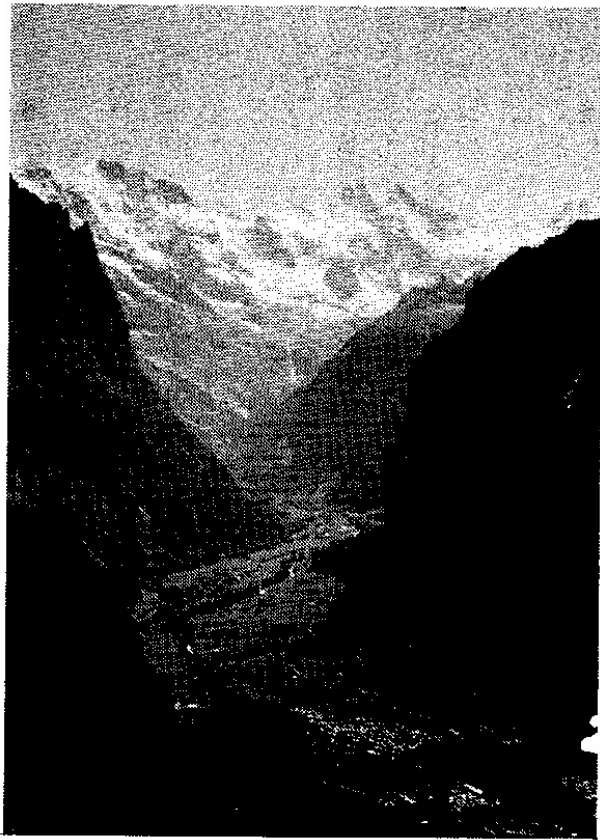
「日本を離れて四〇日になる。いろいろのすらしいものを見もし、知らなかったことを聞きもした。心が温かくなった。満足感を覚える。けれどもそれは真の満足なのだろうか。——日本を離る前には、考える旅にするために、いろいろ知識を貯えたつもりだ。それがまたくまかされていらないとは言わない。けれども旅に出てからは詳細な認識が充分にされていない気がしてならない。毎日いろいろなことがあるので、細かい事は新鮮なものとして受け止めていくのではないか。ルブルのミロのヴィナスでさえこんなものか、と思ってしまう。日本語での認識は、言葉の不自由な現地では単なる物見遊山に過ぎなくなってしまう。僕は留学生ではない、上すべりの旅行者だ。それなら徹底して上すべりの方が良くはないか。」

日本人的思考を外国にいてまでやめている。今にして思えば、長旅の中での五月病みたいなものだったな、と思えるが、その時は真剣で、そして、ウツ状態、だったのだろう。

但し、この旅のあり方についての反問のくり返しが、後の旅を形づくってゆくことになるのだ。

パリ最後の夜、カルチエラタンで南さんを語り、夕食のテーブルを囲んだ。南さんはなおフランス語。勉強を続けると言う。岸田と僕はというと、ロンドンへ入って少し落ちついてみたいと考えていたのだ。そしてそれはお互いの旅の転機への静かな充電期間という意味を持つことになるのだ。その時はアルバイトと英語学校という二つの目的を持っていたのだ。お互いの前途を励まし合い、ワインで乾杯した。

翌日ボローニュ(Bologna)までヒッチで来て、YHへ着る。ここは大西洋に面し、ドーバ海峡を横切るフェリーの出発地でもある。明日はイングランドに渡る。何ヶ月にわたるかわからないが定住するつもりでいる。八月二十五日。旅の一つのターニングポイントにあたる日であった。



転付峠く愚沢岳く小沢ノ湯

1984 8.4(夜) 8.8 川島

いつもの夜行電車に乗るため八王子駅に集まる。メンバーはO氏、N氏そして私である。0時47分まで時間があるので駅をでてちよつと一杯、ビールで乾杯！学生から社会人となり時間が思うようにとれなくなつたので、北アの冬合宿以来の山行である。

身延駅からタクシーにのつたので広河原まで入れた。発電所の裏側より入山する。入山者が少ないせいか所々登山道が草に覆われている。良い天気、南ア特有というか、むしろとする有機質的な暑さである。日頃の運動不足に加えて、夜行の睡眠不足も手伝い、すぐにウジヤジヤける。峠まであと少しというところで、太ももをつつてしまったので大休止となる。O氏、N氏、ごめいわくをおかけしました。峠までだましだまし登る。期待していた峠からの展望は、ガスが湧いていたため良くなかった。(尚、峠より筑が岳方面への登山道は、橋が落ちていたため通行不能です。)本当に山小屋なのだ

ろうか？と錯覚してしまう。りっぱなニ軒小屋ロッジに到着する。
すぐ前のフカフカ草地のテニバに幕営することにするが、まずはビ
ールで乾杯して昼寝をする。

※ニ軒小屋ロッジ 予約をすればリムジンがむかえにきてくれるそ
うです。井川側から入山するなら、アプローチが一日分楽ちん
です。設備もりっぱです。いていて静かですから、キャンプをするに
は適（適）でしょう。トイレはサニト水洗です。有り難いことにビールの
自販機まである。

《よる》《よる》《よる》《よる》《よる》《よる》《よる》
千枚小屋までです。吊橋をわたって対岸から登り始める。ただひ
たすらに急登急登です。万斧沢の頭でやっと思ひ息。そしてまた登
り登り、目の前が急に明るくなりハイマツがでてくると稜線である。
しかしがスの湧きが今日は早く展望は良くない。ハイマツ帯を左に
とるとすぐに千枚岳と小屋への分枝があり下りとなる。お花畑に囲
まれた小さなテニバ（五張程度）に十分程で着く。小屋まではさ

うに十分程下る。水は小屋まで行くようです。まだ早いので、夕飯の下ごしらえをしてビールで一息していたら、どうも空模様がよくない。ときどきポツリポツリぐういだったのが、六時頃より雷雨となり激しい雨足となる。

《夜》《夜》《夜》《夜》《夜》《夜》《夜》《夜》

いよいよこの合宿のメインコースです。千枚岳までは快調にワンピッチで行く。天気良好だが、ややガスの消えるのが遅いような気がする。気分爽快な稜線歩きは今日しかない。しかも少ししかないので、展望をじっくりと味わう。千枚岳からの悪沢岳は貧弱にみえるが、堀見岳・赤石岳は量感豊かで賞祿充分だ。茶臼岳や北岳のあたかもみえる。悪沢岳でハイチーズ！かなりの急坂を下り、ゆっくり登りかえして中岳着。斜面のお花畑の中を荒川小屋へと向かうが、小屋に寄る用もないのでやや上の道を取り大聖寺平へ。ここまではお花畑が多く楽しませてくれる道だ。大聖寺平からいつきにかし場を下ってから、こんどは尾根に沿って下る。ヒザが笑いかけるころ

に尾根をはずれると、すぐに
今夜の宿の広河原小屋に着く。
今夜はビールはないが、小屋
の中でゆっくりとくつろぐ。
三時頃から大粒の雨が降り出
し、雷も混じる。

※広河原小屋 番人が病気で
不在のために無人。他のパー
ティ無し。テントは小屋の前
に二、三張程度。途中の尾根
の赤松林にはマツタケがでる
そうですよ。

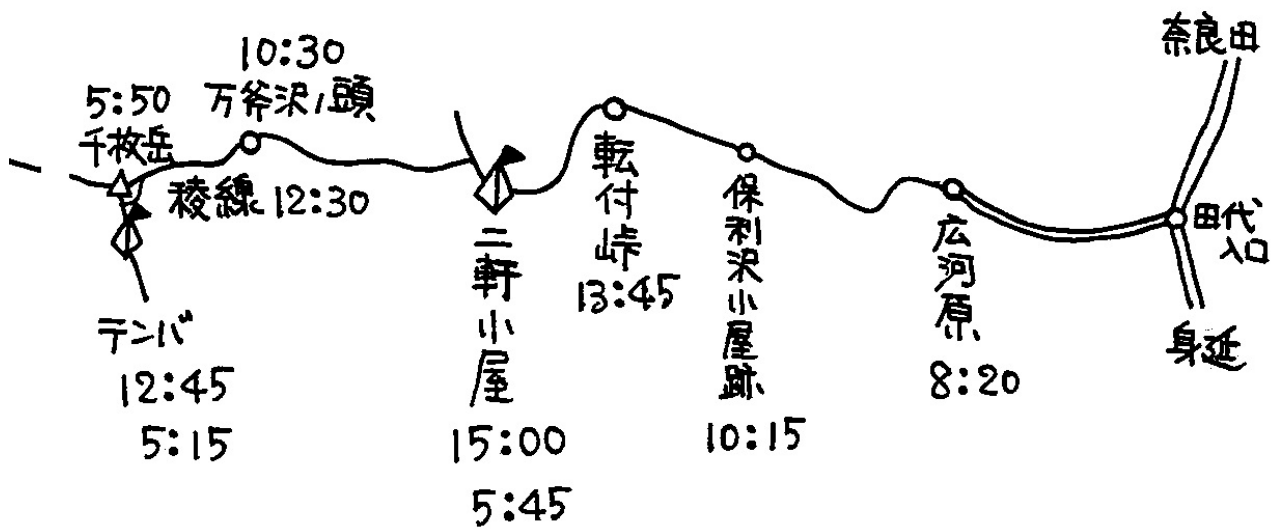
〽〽ヨル 〽〽ヨル 〽〽ヨル 〽〽



悪沢岳にて 8.7

小渋川を渡渉しながら下るので、タンパンとフェルト底の靴で出
発する。巻き道は小屋近くにはみえたただけの様子だが、荒れ方がか
なりひどい模様。水量はあまり多くないので、適当な樺切をひろい
それを川底につき、安定を確保しながら渡渉する。高山ノ滝までは
渡渉教回で快調に行く。ここから川幅が狭くなり、たいへんかと思
われたがそんなでもない。一時間程で樺沢合流。砂防エニティがみ
えるところには、川幅も広がり渡渉も楽ちん。一番深い所でも太もも
くらいまでだし、ダメそうだったらずし移動すれば渡れる所がみつ
かる。エニティ右側にエ事用(?)ハシゴで一気にエニティ上の林道に
でる。あとはひたすら林道を歩く。一時間程で湯析の部落がみえる。
「さあ。オフロードライメニール。ビール。し」と思っ、て荒川荘をたずねる
が、昨夜の雨で林道がぐずれ、管理人が不在のため営業していない。
ガッカリしているところで、地元の人の子に乘せてもらえて、鹿塩
近くまで送ってもらい、懐しの塩湯で「オフロード。ビール。し」となり
満足して帰途へ……

略
図
と
コ
ー
ス
Time



二軒小屋 5:45
||
雨量計 9:15
||
万谷沢1頭 10:30
||
稜線 12:30
||
小屋分枝 12:35
||
テンバ 12:45

広河原 8:20
||
1丁 9:20
||
水場 9:30
||
東電保利沢小屋 10:15
||
沢を渡り離れる 10:40
||
登り始め 11:30
||
大休止(足った) 12:00
||
転付峠 13:45 → 小さな水場 13:30
||
二軒小屋ロッジ 15:00



広河原小屋	8:00
高山 / 滝	9:30
	9:50
砂防エントイ	11:45
荒川荘	13:00

テニバ	5:15
分枝	5:30
千枚岳	5:50
	6:00
3000Mのピーク	6:45
	6:50
悪沢岳	7:20
	8:00
中岳	8:55
	9:10
荒川小屋分枝	9:55
大聖寺平	10:30
	11:00
広河原小屋	13:00

タクシー代

身延～広河原 ￥8,540

塩湯～伊那大島 ￥4,650



広河原小舎前で



渡渉でポーズ

OB会スキーへ参加して
(車 山 ス キ ー 場)

諏訪部 信一

日帰りのスキーでしたが、非常に楽しい一日でした。幹事の榎田君に感謝いたします。出席者も考えていたよりも多く、私 諏訪部とその家族、倉地君、小宮君、小沢君、佐藤君と佐藤君のおにいさん、二瓶君、内山君、寺田君と言うメンバーで賑やかなスキーであった。出発の時間が前日まではっきりせず、集合場所、集合時間が二転、三転し、なかなか決定しなかった。

当日(60年2月17日)朝、目が覚めると頭の上の時計はもう4時30分である。三ヶ木へ5時に集合の予定で、行きながら二瓶君と内山君を乗せて行くことになっていたのです。子供達を叩き起こして、出発の準備、二瓶君の家へ電話と、あわただしく車に乗り込み出発である。二瓶君の家から内山君の家へ、そして三ヶ木へ到着。他の人達はもう待っていたので、車の配分をして、すぐに出発。相模湖インターから中央道へ入り、諏訪南インターへ。そこから、白樺湖を通り、車山のゲレンデへと向かった。ゲレンデ到着は8時30分頃であったが、上の方の駐車場はすでにいっぱいではるかかなたの第何とか駐車場へ行かされてしまった。それでも荷物を降ろして、ゲレンデ連絡バスなるものになり、ワイワイ言いながらゲレンデへむかった。日曜日の為、ゲレンデは大賑わいであり、子供連れの私達はすいている場所を捜しに右左である。それでも自分のエリアを確保し、昼の集合時間、場所を決めて解散である。長女の梓は買ったばかりのスキーをはいて、次女の茜はソリに乗って、私と千秋さんは長靴をはいてゲレンデのはしっこで大騒ぎである。時おり、佐藤君が来たりして、子供達はのりに乗っていた。もっとも、その後が大変で、お昼になって食事をしようとしたが、食堂は満員で子供連れには少々大変である。それでもなんとか食事にありつき、午後は3時近くまでもう一遊び、一旦集合して、記念写真を撮り、夕方まで滑って行くという皆を残して、私達諏訪部家の一行は早目に引き上げることとした。皆に別れ、連絡バスで駐車場へ戻り、一路我が家へ帰った。なにしろ楽しい一日であった。

「え!! 行く人はボクを含めて三人ですか。」

「そうなの、ちやうどだよ。」

こんな今話から今回の山行計画は始まった。サトーさんと平田さんそ本にボクというメンバーではいささか人数的に不安であった。しかし、この際人数でのんびり行くのも悪くないと思った。

橋本駅に夜の11時30分に行くとときには二つのサックはあったが二人の姿はなかった。やかて変な酔っぱらいかきょこどょこと近づいて来た。

「へっへー。飲んぢまうたぜ〜。」

(注) これは平田さんのセリフです。

サトーさんも一時間前に来て飲んでいたのであった。うーむ大丈夫であらうかと心配しながら、そ本ではそろそろ行きましようかという

ボウの声にもかかあらず、平田さんはサッパリか背負えずシタバタしていた。

ハ玉子から列車は込んでいた。しかし、どうして国鉄というのは寝てもすあつても窮屈なサイズなのであろうかと足をあおこれ組んでいると平田さんは座席でゆうゆうとくつろいでいる。

「まっ、たくメケさんは国鉄サイズだなあ。」

「私いくら込んでも平気よ。」

なるほど、サトーさんの言葉どおり平田さんは乗車率200%の夜行列車に乗るために生まれてきたような体である。もしかしたら網棚に寝るかもしれないという冗談さえ本当に思えてきた。そのままホウはあまり眠らず伊那北へ戸台へと電車からバスを乗り継いだ。

戸台からは登り一辺倒であった。正面に甲斐駒を見ながら歩くので期待は自ずとふくらんでいった。体の中で外気にさざしている顔だけが冷たさを感じていた。皆夜行明けの割には元気であった。しかし、北沢峠まであと3時間位という所で平田さんが不調を訴えた。

「眠くてたまりのよ……」

顔面は真青で生気が感じられぬ眼である。樹林帯の中ではあったので風はなかった。サツキを放り出しその上にあお向けにフリーフリー言っているサトーせんかハ々と手を打った。

「マツサーシしてやろう。」

かくして、DrサトーのXマツサーシがここに展開されるのである。先ず、両ソケイ部からむざむざにかけて擦過法でもみほぐしていった。ボクは本当に利くのであろうかと思いついて見るとうつつぶせにして足をインデアンデスロックのように固めていった。ムムムムッ!!こゝろはやるなと私は思った。だが、他の人が見たらこの風景をなくと思うであらうか。30分位休んでから、もう少しフンバロウと励まし合いながら出発。北沢峠までなるとか歩いたのであった。北沢峠は数年前増田さんの手伝いに来たときと比べるとかなり変わっていた。我々は目新しい立派なトイレを正面に見る標示板の裏にテントを設置した。

翌日、他のパーティーが出てしまつたあとからしなく仙丈へ向か
つた。

「こんな時間じゃ小仙丈までかな。」

「オメー、行きたい人なら一人で行ってこいよ。」

とゆーよーな会話をしてボクは一人で仙丈へと足を進めた。す本違
う人々はみんな帰る途中であり、こちらは暗くなるかならないかの
うちにテントに着けるかというところである。足早になりながらも
急斜面を直登し稜線に出ると北岳が美しかった。頂上には何人位の
人が風の吹く中それぞれをくつろいでいた。帰りは風が音を立てる中
をところどころ歩くだけであつた。樹林帯の中でのしんとした静けさの
中を一步一步進むのは陽が沈みかけていることもあり、あまり快適
とは言えなかった。ポケットの中のアメをほおばりテントを目指し
て歩いていくうちに段々暗くなりテントに着いた頃には小屋の発電
機が勢いよく夕方の時を知らせていた。

1月1日。朝から一日中寝て過した。天気は快晴、回りのテント

の人々はほとんど出てしまった。酒を飲んで三人でおせち料理を攻
防しながら一日は過かていった。ここで気付いたのであるが、どう
して平田さんはたて巻きとか、こぶ巻きというものに執着するので
あろうか。サトーさんは完全に酒のつまみとしてしか見ていないの
であるか。ひよっとしたら巻いてある食べ物というのは平田さんに
とっては女性週刊誌にと、ての脱もとかやセ禁の広告のようなもの
ではないだろうか。つまり、平田さんにとってはこれらのものを抜
くとおせち料理が絶対に成立しないというようなことが起こるので
はないだろうか。詳細は今後の検討を重ねたいと思う。

次の日は、昨夜体を休めたこともあり、足どりも軽く甲斐駒へと
向った。駒津峰までは雪もなるとかあり、歩きやすかった。頂上へ
と向かう頃には砂の中にアイゼンの歯をめりこませるところとなっ
た。この登りに意外に手間どりながら頂上についた。ハケ岳が魚眼
しこぶ状の地平線の上に乗っている突起物のように背伸びしていた。
早くも自分の影が長く雪の上に伸び始めていた。記念撮影後ハ合目

を指摘す。もう下りたかと思うといく分祭た。た。岩場をいくつか過ぎて八合目の鳥居が見える所で幕営。甲府の夜景がまらめくテル夕を浮かび上らせ頭上の月には暈がかかっていた。コニロの音だけかいたたましく弱いライトの下で吠えていた。

次の朝は雪が降っていた。ホワイトアウトに近い状態であった。手深りで進み鎖場を過ぎ、下って行くにつれて早くついて欲しい気持ちとなごり惜しさが羊々であった。だが神社に着いた時には疲労感のりでサバサバとしていたのが自分でも不思議であった。社で次回は社会人としてリッパな山行ができるようにと手を合わせて帰路に
ついたのであった。

街の灯へ向けて

S H O

揺れる街の灯はゆかんだゆらゆら

風に吹かある粉雪さらさら

ヤッケはバサバサ

寒さはしんしんと

ささやいてないのは私だけ

テントの中のコンロでさえボウボウト

「明日は晴れますか？」

「あなたは元気ですか？」

「みんなどうしていますか？」

街の灯はいびつな三角の旗となつて手を振っている

「元気で 元気で」

それはサンデヤシユペリが見た灯と同じかも知れない

(注) 詳しく理解をなたい方は新潮文庫

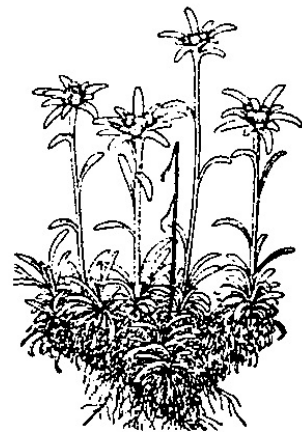
「夜間飛行」——サンテグジュペリ
を参照して下さい。



山の想ひ出

平田 恵

一、ほそばひなうすゆきそう



高校に入学したての頃、この長い名の植物をすっかり記憶していたものだ。周辺知識として、谷川あるいは至仏山の蛇紋岩地帯にのみ産するということも。中三時代か何かは、あのエーデルワイスクラブの某氏のエッセイが載っていたのだろうか。何も知らない純な田舎育ちの私は、かぶれちゃったのね、きつと。

テニスにしようかバスケットにしようかとクラブを決めかねていたある日。夕暮れの教室にふらりと入ってきたワンゲルとかいう聞きなれないクラブの人の、「明日、〇〇教室で説明会をします。スライ

ド上映もします。……中略……合宿は尾瀬に行くんですよ。」

この話は、下校準備に心を奪われていた私の手を止めたのです。友人と顔を見合せ、「えっ、尾瀬？ 私入部しますう。」

「尾瀬にも」あるいは「去年は尾瀬」だったのか。とにかく私は、へ尾瀬へ行けるんだ！としか解釈さえず、いともあっさり決めてしまっただけだった。これが運命の別れ道とは、露程も思わずに……。

ま、至仏に出かけてこの花に会ったのは高2の夏だったのですが、その日は、ちょうど一学期の終業日で土曜でした。夏合宿のためトレーニングと称して丹沢へむかっただけです。渡された成績表のあまりのひどさに意気消沈していた私は、帰った翌日曜の晩に、家出するかのように尾瀬へむかっただけでした。地理の横山先生夫妻と一緒に、他人からみても一目で新婚とわかる時でした。尾瀬は、魅惑的な所でした。目的の花は、ひとまずおいて、原

ばといきなり三往復。しまいには、えらそうに解説を始めてました。
いれく、尾瀬ヶ原は太古の昔、うんぬんかんぬん、この花は何ゆえ
にここにあるか、あーでもないーでもない。……。
七日近く滞在して、とりわけ印象深かったのは、裏燧の木道で昼
寝した事だ。メインストリートに比較すると、人がいないと言って
良いくらい静かだった。あの雲の流れる碧い空を見て、人間の存在
の小ささを悟った。何を齷齪するんだろうかと。

ニ、せんじゅがんぴと

たかねびらんじ



そんな訳で入部したクラブの夏合宿は、南アルプス北部。騙され
たと思っ、た時は、すでに遅し、何のかんのだ言いながらも、性に合

っていたのか、次々にやめてゆく女子も尻目に居つづけた私。その初めての長期山行。北沢峠は、往時を懐ぶよすがもない。マイクロバスが走り抜けてゆく。今日の峠。戸台から真夏の炎天下の河原歩きを強いられ、あの峠は何処へいったのだろう。

十二分にバテたのだけど、本当にあのコーンフレークは経って、一体何だったのサ！ うしろ振り返える事、できなかった。あのよ。

涼し気な樹林の中でなと一層涼気を放っていたのが、この白い花の群れ。あの白さは稟としていたと思う。

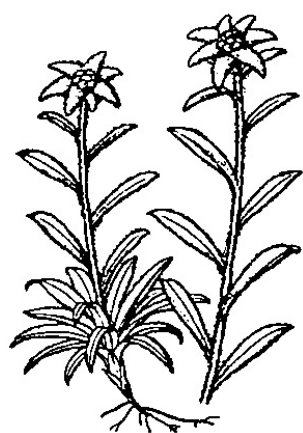
しかし、他の山域でこの花と会っても、この時のような感動がない。南で会った花だと思ひ込んでいる。花も人と同じ一期一会だなあ。

自然は、対面するその人の心をそのまま反射させているんだと、気づく。一番いい状態で会いたいものだ、できることなら……。



三、ひめさゆり

高校の頃、覚えた事どもは、案外いつまでも残る。鮮烈な印象だったのか。“高山植物”。“山の花”などと題する本が、棚を占領し我もの顔に並ぶ。そして、私は、特別な山城を選ぶようになってゆく。今度は、あいつに会いにゆこう。



羽前小松なんて駅は、一生に一度しか降ることがないと思われ、ばかに感傷的になつたものだ。駅は、とうにそれを見越していたと思われ、ひっそりと佇んでいる。観光とか俗物的な物に、侵されていなかった。人間の心を穏かにする雰囲気を持つていて、もう一度降り立ってみたいという気持ちを懐かせた。

軍用車のような幌付のトラックで奥へゐかう。アブの群れに悩まされた事は初めてであつた。北アや南アとはまるで趣きの異なる山容を持ち、なるほどこゝが東北の山なのかと思う。

あいつは実に楚々として、存在していた。その有り様のために、私は少しばかりゆり科植物への偏見を捨てねばならなくなつた。桜の花びらのような淡いピンクのゆりで、やまゆりの花粉やおにゆりを見てきたものにとつて、それは不思議な色だった。

今でも、こゝろきすげを目にすると、心が

乱れる。認めたくない自分と認めねばならぬと思う自分の間をいつたりきたり……。

でも、やっぱりゆりは……。ひめさゆりのみ例外とはいかないものだろうか……。



四、りりひなげし

ブラキストン線と越える。海峡に線が引いてある訳ではないのだ。けれども、甲板に出て眺めてしまふ。北へ行くには、連絡船がいい。函館も小樽も札幌も旭川も素通り。羽幌へ。天竜へ行く船が出る日本海側の港町。地元の人につられて、ピツシリ岳へ登る。はるか彼方に利尻が望まれた。雲の上に浮かぶ頂。あれが積年憧憬し続けた山なのか……。想ひが一層強くなった。

この山で、りんねそうと会う。思っていたよりずつと小さな姿だった。必ず2つ、それも下向きの花をつけている有り様は、文句なくかわいい。

利尻は雨だった。船上からは、くつきりとその勇姿を見せていたのだ。船は、島へというより山のめがけて進む。一七一九mの山の裾野に町がある。海の下に、かくれている本体の一部分にすぎない

のだとは、到底にゆかに信じることはできない。

登りはきつかった。しかも、夜は満天の星だ。たのに朝はが入で視界がきかないときでは、黙々と歩かざるを得ない。唯一の救いになるはずのあいつには、まぶ会えない。頂上に着いてしま、た時は、本きにガツフリきた。嘘でしょう、会えないなんて……。あとは、時間の許す限り、尾根上を探し回った。そんな状態だ、たものだから、目にした時は、一瞬疑ってしま、た程で、本物と判、た途端、涙をあとしてしま、たのです。我ながら、非常に耻しいことですが、あまけに接吻も。愛しい人に会、た、や、と会えたという気持ち。のちの数分は、まさに至福の時。時間よ止まれと叫びたか、たな。白っぽい緑色の地面にはいつくば、た葉の間から、檸檬色の花と咲かせているのです。

最北の山に、今年も花を咲かせただろう。もう一度、彼女に会いたいと思う。

五、ヌタクカムウシユペ

カムイミンタウ——神々の遊ぶ庭——と命名された場所は、北にはいくつもある。人の訪れることができないような半島の突端の入江や、原生林の奥の谷地、海に浮かぶ名もなき島……。ヌタクカムウシユペのそれは、花々の咲き乱れる雲上の樂園であつた。

大町桂月の言葉は、まことに至言であつたと思う。広い。広い。

私は残念ながら、ガスの中、幻想の広さを知るのみだが……

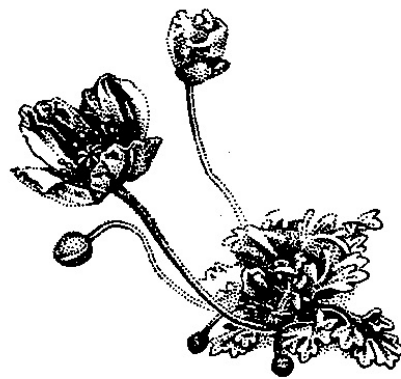
確かにそこに、カムイミンタウは存在すると信じられる。とにかくここばかりは、いくら紙数を費したところで語りきれぬものではない。我と我が目でしかと確かめて欲しい。できることなら七月中旬、広さの判る晴れた日に……。

尚、ガスにまかれれば、なすうさぎとも遭遇できることを付け加えておきたい。

李朝の白磁に
われもこの花

高麗の青磁に
うまき酒

この世界と
体得したいものだ



一九八五年

神無月の候



あうとどあのたきび



インダアでやることになった

焚き火は外でやるもんだ

Jaru Sato

パチパチと火が燃えそいる、

「まあ、いつよう乾株しようぜ」

火に照らされて顔が赤い。その

顔がそこにいる色になつていく。

山にはまだ雪が残り、寒い夜、

そう、その夜は寒い夜なの、あ

の雪は残雪ではないのかしられない。

いま、まさに今、降りつまつたば

かりの雪だったのではなかった

かな？　まあ、とにかく冷えこ

んでいたの、こんな夜は、火が

変しい、本当は恋しいわけ、

「うん、焚き火はうれしい」

「酒は夜の友達」

「こんな夜は焚き火が最高だね」

「こんな夜は酒も最高だね」

「さきとうに酔い、さきとうに、

あたたまり、あれ？　だれなん

だ、車の下に潜り込んでるやつ

は、「自転車はふとんではない

ぞ」　杉畑君ではないですか、

この会には変なやつがいる、そ

の夜、(だったかな)皆がいいよ

持ちで酔つていたころ、エンジ

ンも高ぶかは一合の車がキヤ

ンブ場につ、込で来た、このエ
ンジンの人、は、まさか」とだれ
しと思っ、ていたの、その車は、
まようことな人、我々の所にむか
ているではない、他にモキヤン
パーはいるのに、なんでもここ
来るのだ、うろつをもしないで
不思議な習性をもっている、ね
大川さん、

まあ、こんなぐあいには廻り目
平の五月のこむい夜は遙に酔
ていたわけ、山は、もうだ、山
のことも話さなければ、もさる
ん登った、りです、金峰山に、小

川山も途中まで、この山途中ま
でが、おも白い、たしか新小川山
登山道といつたはず、金峰はし
かり五丈岩にも、のつか、て来た、
ところ、で金峰山は何と読むの
でしょう、キンブサンとは、いう
のだけど、この呼び方甲斐側の
いい名で、こつち側は、キンポ
ウサンと呼ぶの、どつちもい
い、てわけではない、エベレス
トも中国ではチヨモランマとい
ているのだから、ね、
前に、だれかがいっ、ていたが
ワシは火つけがうまい、という

やつがいたが、これでは放火に思われる、のびなでにワシは火を上手に作れるのか、というやうなことを話してみよう、ここぞウイスキーを一口、うまい、これニッカウキスキーのピュアモルトのグラグ
ニッカピュアモルトはエタノール
グラグラベル

伝統的な、北海道余市のモルト原酒(ハイランドモルト)を主に使用した、力強く男性的な風味。
レッドラベル

近代的な、仙台宮城峡のモルト

ト原酒(ハイランドモルト)を主に使用した、繊細でやさしい風味。
エタノールをバツ
ティンク(混ぜ
合せる)すれば、あなただけのオリジナルピュアモルトが誕生します。

モルト同しを混ぜることを
バツ
ティンクといひ、モルトとグ
レーンを混ぜるとブレンドティンク
という。

モルト原酒は大麦からグレーン
原酒は穀類(主にとうもろこし)で
作られるのです。

ところでなんだ、け？、？？

ここでもまた一口、オーおいしい。

あーそう、ただ、火事には気を

つけなければいかん、危ない

焚き火をすまふキャンプ場で

火をせなくなるのだ、研摩り

やうな所なす、許す、気をつけ

れば、なぜワシがうまく火を

すことかでありのか、もうよこ

れよ、
おの家の
ワシ、
これはほんとの青野原、誤

ワシ、
これはほんとの青野原、誤

又キデフ口をワリス、そう今だ

に天然燃料を、使用しているの

で、ウラが、火の名人なの、

ウラがよー、小学校、中学校の

ころはよー、大川に(通志川)およ

ぎに行く時に、それけいへん

の煙か、とうもろこしをかつ

ぱる、つた、それを皮ごと火に

つくべて焼いたものだ、こんな

ことを、皆でやつたものだ、

大人はついていない、小んだけ

なわけ、そりころはそんなもん

よ、

さてさて、ところによーなん

ど木が燃えるか考えたことがあ

るでしょうが、簡単に言えば、

火をつけるかだ、うん、あた

りまえた。木の成分は、セルロースがほとんどで、その他へミセルロースとリグニンも含まれている。セルロースはどの樹種でも共通にある。こいつの実験式は $(C_6H_{10}O_5)_n$ となるらしい。すなわち「すみれん」(すんぞ)は地球上に存在する樹木はすべて、炭素と水素と酸素でできていたのだ。他の成分もすこしだけある。灰として残るものが、それだ。けれど何かにもなすんだらうが、木はCとHとOで、できていたといっている

い、だから燃える、火をつけてのは、それがいちばん簡単に燃え始められるからで、落葉、すなわち、電気によって木はつく、必要なのは、熱なの、酸素がなくとも燃えたと、いったらあどろくか？ 頭のいいもんなら成片中に「〇」があるから可能だといふのだらう、ところがどっこい、燃えちゃうの、燃え方がうけど、じゃあ何になる。(ここでもしばらく考えてくれ！) 昔の人はうまいもんを考えたものだ、コントイチ、それは黒い、わか

ただろう、そうなんです、それ
です、焼き鳥に最高にいい、ビ
ンヤ、ウタンが最高級品、

木は熱と空気(酸素)があれば燃
えるの、水があつては当然だめ、
樹脂(リグニンなど)の多い木(松など)

針葉樹は生でもよく燃えるとい
うけど乾いていた方がよく燃え
る、だいたいい火がつけにくい、
よく乾いた、といつて50%は
水分を持つているが、とにかく
乾いた木、持つてみて軽ければ
いい、中には気乾比重で1.06なん
て重い木(ウバメガシ)もあるけ

ど、だいたいい木は水に浮く(気乾
状態で)、乾いた木を、空気の通
りがいい状態にし、しかなあ
たがいが熱を出すので、はなし
せず、と木を組めば焚きたは燃
えるのです、
「はじめよう」

次は、赤く燃えたらまきく
べ」なのです、雨の日も、雪
の中でも火は作れるので、エ
ン、うしだいで、楽しい、い
るんは焚きたがります、

最後にくれぐれも

小さいなう
おしこいて

火の
用
心・水用意

完全に
消すことを忘れた、

以たもの親子の

大菩薩 山行記

嶋崎 三郎

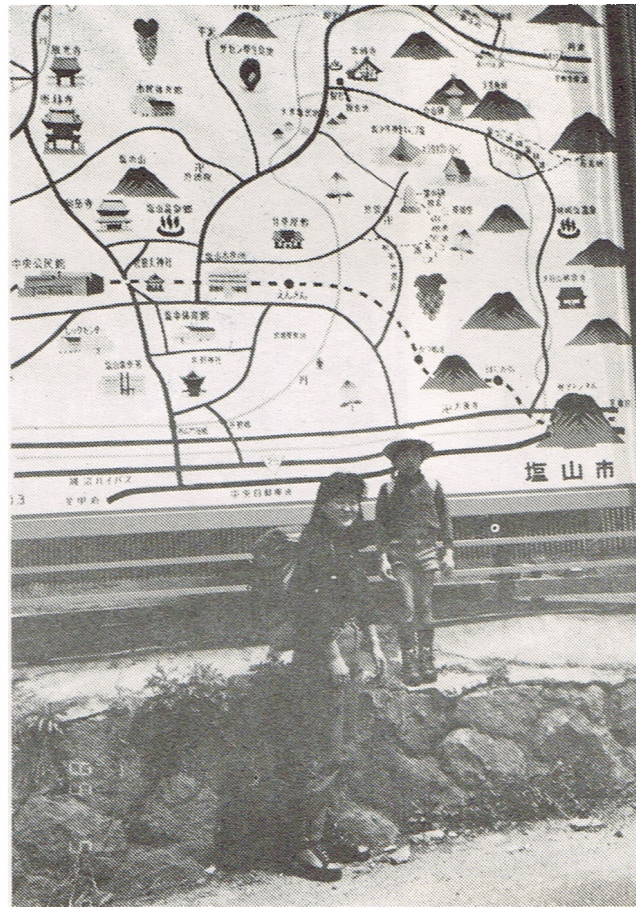
智宏

85・5月5日・6日と、子供
の日を記念して山へ行こうとい
う気になる。3才の頃に丹沢へ
連れて行ったことがあったが、
自分の事が何一つできない年令
だったので、だいぶんこちらが
つかれてしまい、それからしば
らくはほとんど山なぞには連れて
行っていなかった。が、今年は
小学校一年になったことであり、
そろそろ山へ連れて行って

もだいじょうぶだろうと思い、
山に行くことに決めた。うん。

さてさてどこへ行こうかと考
えて、どうせなら、オジイチャ
ン、オバアチャンのふるさとと
いうこともある大菩薩一とはい
っても、ふもとの小菅村だけ
と一へに行くこととした。さあ
もう一つ大きな問題を解決する
ために、おてつだいさんを連れ
て行けば、だいぶん梨ができる
のではと考えて、職場の人と一
緒に行くことになりました。
これから写真で紹介します。
ピンボケはかんべんしてと。

まずはコレ。裂石での出発時。
 どれですか、やけに太った人が
 写っていると思った人は、失礼
 ですぞ。



(塩山ではバスの接続が悪く
 タクシーにて入山。だんだんぜ
 いたくになります。)。

コースとしては、まるかわ峠
 より大菩薩のコースになった人
 で、とりあえず み枚目。



この写真ゆとりあるでしょ。
登りはじめの写真なんだから
かな。ゆとりがあるうちはよか
ったんだけどね。
たれですか。みんなとろろで
写真をとってなんていう人は、



又目、天気が少し悪いので
す。朝方から霧雨。カッパをき
ての記念写真。まったく展望の
なし。



『へん』『きこえもの』『勝つて
すよ。』

ワハン。やったね。大菩薩峠。かっニよく決めるから良く写してね。——智宏
 ホッパタにアメダマ入
 て取ってもダメ。——三郎



お天気回復、日頃の行ない
 が良いせいだぞ。
 おてつたのさん
 「こら」かってにVサイン
 するな。——するい人。
 智宏が写した写真。ウーン。



オ・ウ・サン、ほう決めるよ。
 丁サイン出してよ。僕は決ま
 っているのにな。 智宏
 まったくサインなんてのは
 山仲間とやるものだ。お三つた
 時のイ・ゲンがなくなるよ。三郎



まったく、かっこうだけは
 一人前なんだから。三郎
 まいったな。みんなが僕

のニと、オトウサニにそっくり
ていうんだよ。僕はアゴ、シャ
クレテなんかないのに。 智宏

子供との山らしい山が初めて
で、少なからず心配をして荷物
も多めで、つかれた日間だっ
たが、子供は元気で、アメダマ
パフーとやらでかニバツテいた。
まるかわ小屋のオヤジに子供材
敷にいられて、いろいろなもの
をもらったが、手作りのキーホ
ルダーはいい記念になるはずだ。
とりあえずは、ヨカッタ、ヨ
カッタ。ホントニ。

智宏の自筆です

しまぎぎ
とむろ

いっしょうけんめいやまにの

ぼりました。すこしかれた

けれど、がんばりました。

おとうさんはいえでいると

よりちやむいかった。

お月見山行

江成判一

ふ88年のお月見山行から場所
は山小屋近くの林道 あまり乱
れなかったとある途中から雨
が降り出したと云うもののメン
バーの一人が結納の席不参加で
あった と云われびっしりに
なつて狭い車の内で寝た。

つぎにふ89年の報告から場所は
三ツ峠 場所的な問題から
現場に着くのが遅すぎた 目が
真上に出て来た頃後光のやつら
がみやげを持ってやって来た
(たこやき)
他の他のみやさんが寝ている内
ろオオ中心に朝まで騒ぎまくっ

た 山やはとにかく自分本位だ
翌朝がツツあるやつら (後光を中心とする一組) が
先に行くが と言つてボルガー
リングをやり三ツ峠へ向うの
を寝不足の目で見送る 今日
はぽかぽか天気まずは朝寝つぎに
昼寝いいかげんしてから酒くさ
い体在三ツ峠へ向けて歩き出し
た。三ツ峠では岩場と富士山が
よく見える所でありインを飲んで
楽しんでいた三ツ峠は岩やでい
っぱいだ昼の時報近くがツツあ
るやつらと合流すこし遊んでか
つ下山 として山行ふしかつた
し月も見るとか出来た。

水上温泉ファミリースキー

諏訪部 信一

最近、子供達と一緒に過ごす時間が少なくなっている。仕事に追い回されている為とも考えられるが、やはり、家庭の一員としての責任を回避しているような気がしてならない。そんな理由があるからと言う訳でわないが、ここ一、二年シーズンになると家族四人でスキーに出かけることにしている。長女の梓は6歳、次女の茜は3歳であり、私と千秋さんの二人で子供の面倒を見ながらのスキーの為、若い人達のようなスケジュールは組にくいので、第一日目は目的地への移動、二日目がスキー、第三日目は帰宅と言うスケジュールである。今年は前年と同じ群馬県水上温泉へ行くこととした。宿も去年と同じ所とし、のんびりと温泉につかりながらのスキー計画としたのである。

昭和60年3月3日(日)、早朝の出発は計画していても実現は難しいものである。それでも、子供達を起こして、7時に自宅を出発、16号線を八王子へと向かう。子供を連れた早朝の出発の秘訣は朝食の考え方である。私の所では、自家用車で出かける時は外で食事をするようにしている。遊びに出かける時、朝からもったいないという気がしないではないが、早朝、寝起きの状態では、食事が出てきても満足に食べられない事が多い。さらに、出発に気がちっている為、食事に気持ちが集中せず、時間ばかりたってしまうことが多い。そのような事から、我が家では、一度出発をして、少し行ったところで食事することとしている。16号線を八王子へ向かい、八王子の町を通り、八王子インターチェンジへ到着、ここのロイヤルホストで朝食である。橋本から約30分、少し目が覚めたところである。食事をして、一路、16号を北上する。横田を過ぎ、入間から川越へ。川

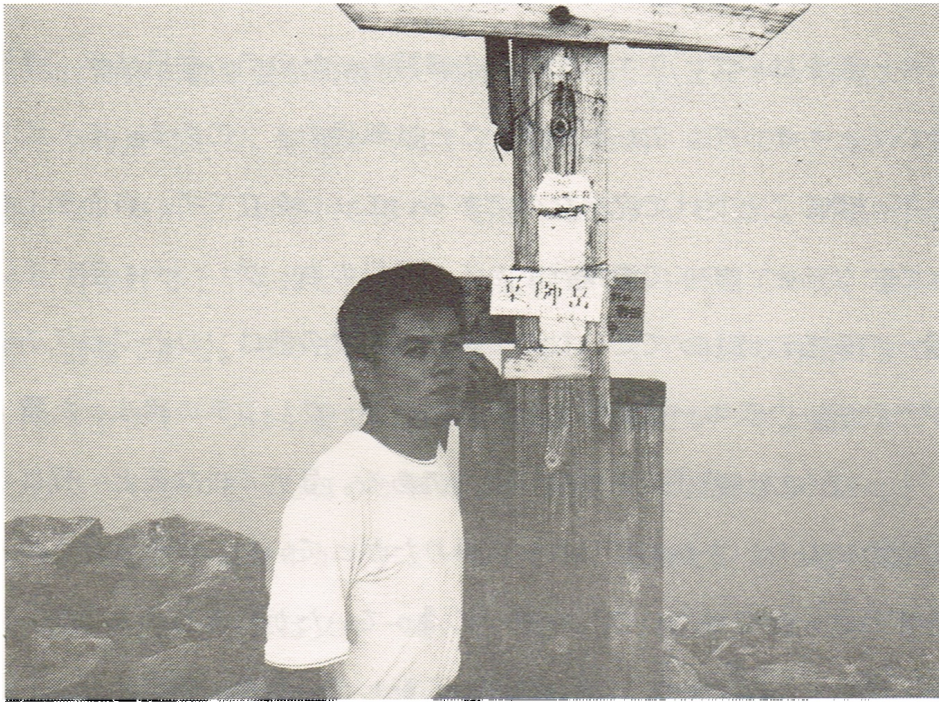
越からは関越自動車道が前橋まで開通している。八王子から前橋まで、順調に行けば1時間30分程度である。前橋からは17号線を新潟へ向けてひた走りである。前橋の市街地を抜けて、渋川へ、利根川を渡り、沼田へとすすんで行く。前橋から沼田まで約1時間。さらに月夜野で17号線と別れて、水上町まで約1時間である。橋本から約4時間で水上温泉へ到着である。その年の積雪にもよるが、17号線の月夜野までは雪の降った直後でないかぎりチェーンは必要ないはずである。月夜野から水上温泉までは途中からチェーンをつけるつもりで走ったほうが無難であるが、今年は最後までチェーンをつけずにはしってしまった。去年は途中からチェーンをつけ、旅館とスキー場の間の往復もチェーンをつけてであったが、今年はスキー場へ行くのもノーチェーンであり、非常に楽であった。昼前に旅館に到着、着替えをして、昼食を食べて、スキー場へ。スキー場は温泉街から車で10分の大穴スキー場が我が家のホームゲレンデである。さらに車で行くと、谷川温泉があり、ホワイトバレースキー場や奥利根高原スキー場があり、非常に便の良い所である。子供を連れてのファミリー向けとしては大穴スキー場がおすすめである。中級コース1コースと初級コース2コースの構成で、ソリスペースが広く、子供達が遊びまわるのに最適なのである。一日目は早めに旅館に引き上げることとした。今回で3回目の旅館は、なれている反面、食事も前回と同じような気がして、なんとなく新鮮味がないが、温泉で旅の疲れをとって、のんびりして食事をするのは非常によいものである。一日目は、旅の疲れもあり、早々に寝ることとした。

二日目(3月4日)、いつもは寝ぼすけな子供達も、早くから起き出してきて、朝食の来るのを待っていた。食事が終わり、いっぶくすると出発である。ゲレンデは昨日と同じ大穴である。昨年と違って、雪が少ない為、ゲレンデのすぐ側まで車で行って滑ることとした。駐車場は昨日の時点で見えておいたので、ゲレンデの下まで直行である。長女の様には、今年はきちんとしたスキーをと言うことで、子供用のスキー板とスキー靴を買って来

ていた。昨日は、スキー靴をはいて、スキーを付ける練習をしたので、今日は歩く練習である。多少靴の大きいこともあって、エッジを使うことは無理のようである。本人はまったく関係なく上から下へ滑ることだけで充分なのである。エッジを立てて、斜面を上昇することが少し出来るようになると、すべて直滑行である。平日の為、ゲレンデも空いていて、子供が直滑行で滑って来るにはもってこいなのである。次女の茜はソリとプラスチックスキーであるが、プラスチックスキーは新雪などでは良いが、ゲレンデの締まった雪ではあまり役に立たず、もっぱらソリ遊びの方が良いようである。昼近くになると、梓はじょうずに直滑行で滑るようになり、さかんにリフトに乗りたがっていた。子供達がさかんに遊んでいる間、私と千秋さんは交替でリフトを使って滑っていたが、あんまりリフトに乗りたがる為、私が上へ連れていくこととした。最初は心配していたが、何回カリフトに乗るうちに、その面白さを知ってしまい、子供達がいるので、回数券でよいと考えて、回数券を買って使っていたのが、大きな間違いで、その日一日だけで、一日券が三枚ほど買える程リフトに乗ることとなったのである。それでも、途中、梓はリフトの係りの人にただで乗せてもらったり、千秋さんと梓で乗りに行つて、ただで乗せてもらったりしての結果である。ゲレンデが空いていると言うことは非常に恐ろしいものである。

三日目（3月5日）、最終日も当然のごとく、早起きをしてゲレンデへ。茜は少し疲れたようであるが、梓は自分で板をはいて、どんどん行ってしまう。今日は家に帰るのだからと言って、あんまりリフトには乗らないようにしたが、最後には茜もソリを抱えてリフトに乗り、一番上からソリ滑りである。其の日は、お昼で終了とし、旅館で着替えをして、2日前に来た道を帰ることとした。水上温泉を一時近くに出発し、途中のクリスタルガラスの工場を見学したりして、懐かしい我が家へ到着したのが、夕方5時近くであった。

『薬師から槍へ』



昭和59年2月3日〜6日

小宮 豊

上野駅を夜行で出発し、信越線で富山に着き、富山地方鉄道で有峰口まで行き、バスで有峰湖を見ながら折立に着いた。今日はうす曇りであるがまずまずの天気である。さあ荷をつめ直かし、出発。

木立の中のだうだら登りを登ってゆく、だんだん天気があやしくなってきた冷たいものがぽつりぽつり、急ぎ足の途中の湿地帯にニッコウキ

に着く、清流がとうとうと流れ、実に気持ちのよい所である。黒部



スゲヤワタスゲ、キンコウカの群落
を見ながら、太郎兵衛平へ午後一時
前につく、天気は回復してきた。一
路薬師小屋を目ざして、ハウサニイ
チゲのお花畑の中を登ってゆく。午
後三時すぎ、小屋に着く、到着が予
定よりも早いので休憩して薬師岳ま
でピストンをするにする。一時
間足らずで山頂に着く、夕日とカー
ルを後にして小屋に帰る。

二日目、午前五時に小屋を出発し
て太郎兵衛平を経由して、一気に五
百メートルほど降下して薬師沢小屋



川の上流部分であり、イワナがよく釣れるそうである。

あまり休んでいると日が暮れてしまつので重い腰を上げ出発する。雲の平までの樹林帯の中を一気に登りつめると三時間程でやっと雲の平の端のアラスカ庭園に着く、ここは背の低いツカと岩がおりなす景色である。なだらかな道を登つてゆくと、奥日本庭園に着く、ここは岩が枯山水の石庭でもみている気にさせてくれる。

午後一時半に雲の平山荘に着く、アム目の前がギリシャ庭園である。

雲の平 マップ

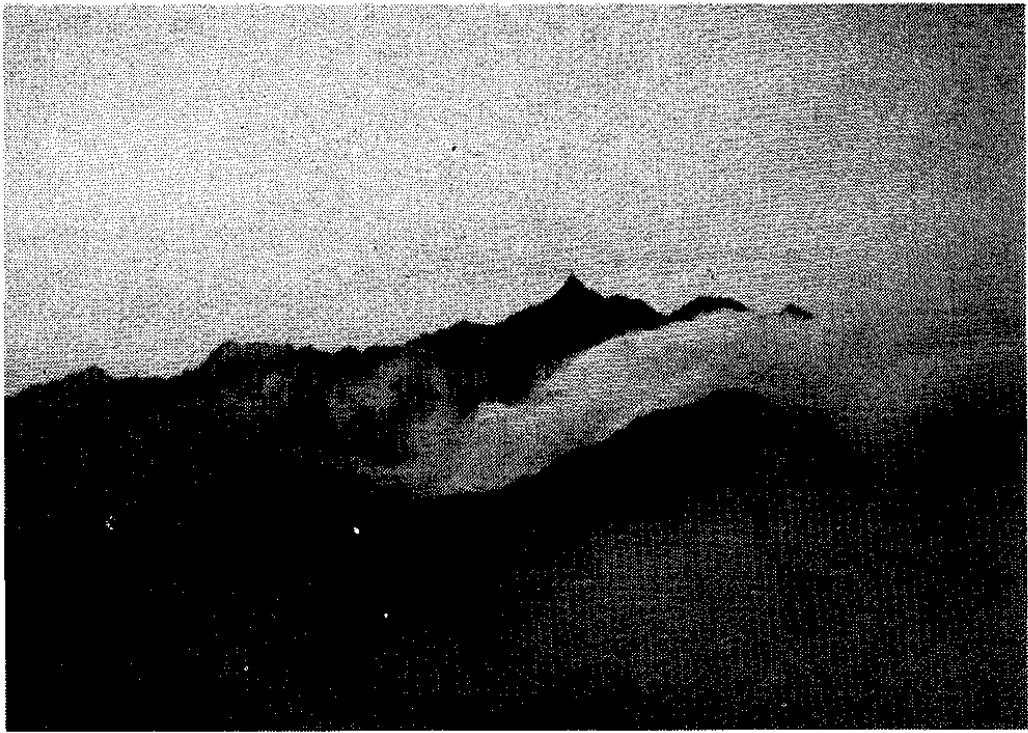


しばらく歩くとスイス庭園であるが、今年の夏の雨不足のためか本平の池塘に水晶岳が映る美しい景色をみれずに残念である。

雲の平をあとにして、黒部源流を渡り三俣山荘へ急ぐ、にわかには暗くなり雨になる。午後三時半に三俣山荘に着く。

三日月、今日は今までで一番、天気が良そうである。ご来迎がおかめそうなので急いで仕度とし午前四時に小屋を出発する。

三俣山頂でご来迎をおかめ、実に三百六十度の展望と雲海が美しいが、



槍ヶ岳はまだほるか遠く見えるだけである。これから、あそこまで歩くとと思うとうんざりである。

双六山荘を経て、ハクサンフウロ、ウサギギク、イワキキヨウ、イブキジャコウ草などのお花畑の中を槍ヶ岳へ向う。気持ち良い稜線歩きが三時間程つづき、最後の岩の急登を登り槍ヶ岳山荘に着く。正午に槍ヶ岳山頂に無事登頂。残念ながらガスが出て視界がかすかに小槍と槍沢しか見えなない。

午後四時半すぎ、槍沢ロッジに着く、ここにはお風呂があり、山のあ



78

南アルプス横断

10期 小沢 聡

夏の甲府盆地の早朝は雲におおわれていることが多い。その雲でふたをされた盆地の下を三人は身延線にゆられていた。

その雲も朝八時を回れば上か。てしまうもので、三人がタクシーを降りたのもその頃だ。

八丁峠までの登りは道も荒れ、景色もなく夏の太陽がちょうど昔中から照りつける。八月五日というのに入山パーティは他に大学山支部一隊のみであるらしい。

転付峠の手前から急登が始まる。ここで川嶋の足がつってしまいくらいにもならなくなりしばらく休んだ。

「川嶋！ 大丈夫か？」

「ダメダー。」

という声が南アルプス山中に飛び交ったのでした。

縣付峠に到着したのは午後二時近くで展望は雲にさえぎられていた。ここは山領づたいに林道を走っているバイクで走ったら面白いだろうかと通行止となっている。

約一時間ほどで下ったところに二軒小屋がある。ここは広い芝生ときれいなロτζジが建っていた。その芝生の上でしばし寝ころぶと、ふと見ると小人も母親が木かげに座っているではないか。後で聞けばリムジンバスがここまで来ているとか。

翌日はただひたすら千枚岳を目指す。途中のお花畑だけが心の慰め。三人がいかげんウンザリした頃千枚岳の森林限界を超えハイマツが現われたが、すぐに下り千枚小屋の天場にテントを張った。午後一時というのに雨だ。

「こりゃあ来るぜ。」

と思ひながらビルを飲んでいると来た来た、雷か。

今日は、今回の山行で只唯一の稜線歩きができる日なので気合が入って、五時十五分に出発した。千枚岳への登りではクガビルが

口をバツクリ開けても、すごい形相でへロしかたを付けて、こちらも体をのたうと、なから逃げ回るシミズを追い回していた。いやです。

生臭い語は朝日の中の大展望で消し去り、我々は今回の目標、荒川岳へと向かうのであった。

やっぱり荒川岳はでかい、高い。八年前の南アルプス全山縦走の登り残しの宿題をようやくはたすてとか出来た。しーを取った後、もう下りしかないなんてちよっとさびしすぎる。でも荒川小屋を少し過ぎたあたりで黒百合の群落を見つけた時は感動物だった。

大聖寺平からはもう情無用とばかりに下って着いた所が広河原小屋。たれもいなかた、フーことはビールもない。打上げも出来ない。蚊ッワンワンいる中寝たんで、翌朝キンカンが大活躍。

今日は天気は絶好調、小笠川下りには持つて来い、フェルト張りの地下タビに白樺の棒を持って大胆素敵に川に飛び込む。

徒渉を十分に楽しんだ後、砂防ダムに到着した。来年にはダムが完成し、水もたまれば今歩いたコースは水底になると聞いた。じお

やら言き良き南アルプスの最後を味わえたようだ。

余談だが二瓶はビールに酔っ払う。て駅で行き方不明になった。

『だれも書かなかった剣岳山行』

小宮 豊

昔の誌にたうてしきいすが、今から二年前昭和五年8月5日から9日にかけて、江成、小沢、榎田、松田、二瓶、そして私の6名で剣岳を目指しました。今回の動機は県山岳協会のあつあつつけカレンダールの7月の絵をみて安易にきまっていたまい、コースも写真の上より長次郎雪道をつめるコースとした。このコースは新田次郎の「剣岳点の記」の中で登頂コースでもある。では本文にはいりましよう。

夜行の急行で我々は犬町に着き、タクシーで扇沢へ向い、トロッポバスで黒部ダムへ着く。さあここから峠越え山行の始まりである。ダムのわきとありてゆき、放水している見事なダムをあとにして、黒部川沿に内蔵助谷出合までゆき、ヤブの中の悪路をハシゴ谷乗越



も目ざして登りつめてゆく、本台に
 この直は歩く人が少ないのか、ヤブ
 コギの連続で汗と虫まみれになり、
 カ一峠越しし、真砂沢のキャンプを
 目ざして急勾配を下る。剣沢を渡り
 真砂沢へ着く。まずはエビスビール
 で乾杯！さあ、明日は念願の剣岳初
 登頂である。
 二日目、天気は良さそうである。
 朝の体操をし、ピッケルを持って雪
 溪を一路頂上へ目ざす、両側の切り
 立った崖がだんだんせまってくる、
 右に八峰を見ながら高度をかせいで
 ゆく、と、急に地響きとともに雪壁



が崩れ落ちたのである、クライマー達があわてて逃げてゆく、折角のシヤッターチャンスだったのに、見すごしてしまった。クレパスと落石に気をつかいながらとうとう雪後も終わり、最後の急登となる。ここが点の記の中の最大の難所と書れているが、意外とらくに登りつめ頂上につく、頂上には小さな祠があり、その前で全員で記念撮影をしたが、残念なことがあって視界がさかなくなってしまう。カミナリがなってきたので急いでテントへもどることにした。テント場につくやいなやに雨



が降り出し、かんいっぽつセーフである。

三日目、真砂沢のベースキャンプをたみ、オニの目的地仙人池を目指す。剣沢沿に下ってゆき、二股でまた仙人峠への急登を登ってゆく、樹林帯をすぎると左手に三ノ窓雪渓、川窓雪渓をかかえた剣の岩峰がみえ、しばし疲れを忘れ休憩を取るが、ランチの食糧が欠乏してきた。稜線沿に登ると右手に小さな池が見えた、あれが仙人池だ。いそいで下ってゆき仙人池ヒコッテに着く。池はあまりきれいではないが剣岳の眺めと池



に眠るシルエートには日本ではよく
 スイスにでも来たような気分になる。
 今回の山行の疲れも一気にふきとん
 でしまった。午前8時過ぎの斜光線
 と晴天にめぐまれたのはラッキーで
 あった。まずは缶ビールで乾杯。あ
 くおいしい。時間のたつのも忘れ、
 二時間近くも休憩してしまった。
 仙人谷沿に仙人湯の湯けむりを目
 いるーにして下ってゆくと小さな
 露天風呂がある、ここが仙人湯であ
 る。又、天気があやしくなってきた
 たので、急いで阿曾原小屋へ向う。
 つづらおりの急坂を下ると阿曾原小



屋につく、ここで腹かへったので、
ラーメンを食べる。

阿曾原温泉は黒部峡谷沿にあり、
高熱隧道からの温泉を使つての露天
風呂となつてゐる。実に峡谷を見か
るゝの缶ビールはおいしいものだ。

四日目、黒部峡谷沿の水平道をけ
やキ平駅を目ざして出発する。絶壁
の中をヤーミートル程にくりぬいた
道やまつくろちトンネルをぬけて四
時間程かけて駅に着く、もちろん駅
につけば、ビールを飲んで乾杯。

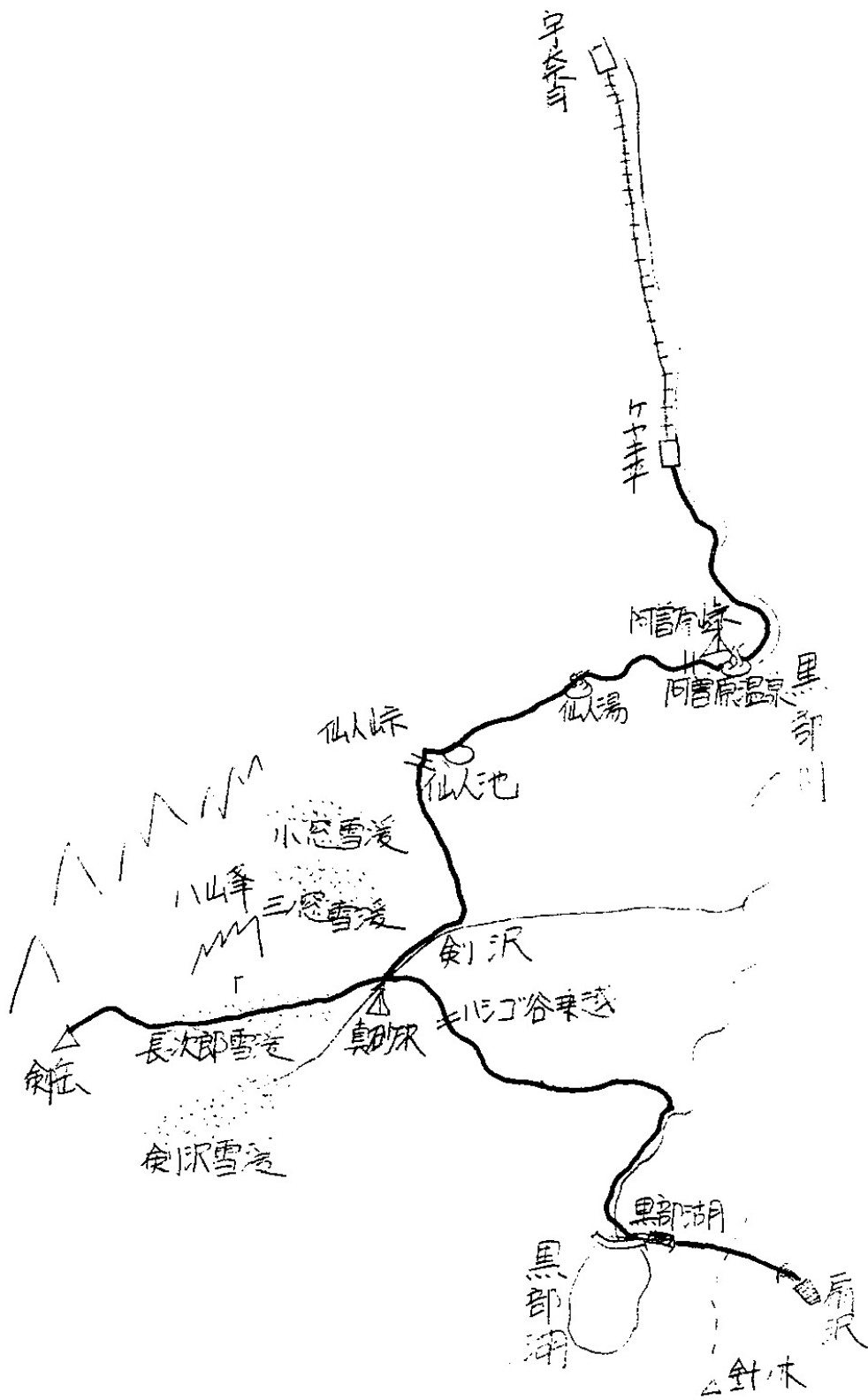
けやキ平から宇奈月まで黒部峡谷
鉄道のトロツコ電車に乗つて、峡谷

美を見ながらコックリ、コックリ、

剣山行は私の今までの山行の中で特に印象に残った山行なので
二年前でありますが書く機会がなかった。なので今回書かせてもらいま
した。記録等が残っていないのでコースタイム等を忘れてしまいま
したので書くことができず残念です。まあ、とにかくこの山行はミ
とことどいいますと卓越えとビールの山行でした。

ビールはやっぱり
エビスビール





昭和60年度S. W. V. O. B. 会総会

1) 昭和60年4月 7日 神奈川県立相模原青少年会館 会合室A, B

PM1:00-PM5:00

出席 19名 委任状提出 10名 合計29名

2) 総会議事

a) 開会の挨拶 59年度会長 諏訪部信一

b) 議長選出

c) 59年度行事報告 副会長 佐藤 通(山行)・副会長 榎田一典(一般)

d) 59年度会計報告 会計 泉 篤志

e) 質疑応答 特に賛同はなし

f) 新役員の選出 別表の通り

g) 新会員の紹介 入会案内は卒業生全員に郵送したが、当日は一人も出席なし

h) 60年度の行事立案 5月合宿 ハケ岳ベース
ファミリーハイキング 場所未定
夏合宿 南アルプス方面
お月見山行 場所未定10月ごろ
正月山行
スキーツアー
その他山行

i) 閉会の挨拶

59年度行事報告

4月22日	59年度S. W. V. O. B. 会 総 会
5月 3日-6日	5月合宿(奥秩父 : 廻り目平ベース) 参加者 佐藤・江成・松田・二瓶・嶋崎・榎田・倉地 増田・小宮
4月29日	山 小 屋 建 設 作 業 参加者 榎田・増田・小野・中里・松田・川島・二瓶 平本
4月30日	山 小 屋 建 設 作 業 参加者 諏訪部・小野・中里・松田
5月 3日	山 小 屋 建 設 作 業 参加者 諏訪部・秋山・寺田・富樫
5月17日	5 月 定 例 会
5月20日	山 小 屋 建 設 作 業 参加者 佐藤・榎田・川島
5月27日	山 小 屋 建 設 作 業 参加者 佐藤・榎田・川島・松田・内山・二瓶
5月31日	相山協 岩登り講習会 大野北公民館
6月 2日	6 月 定 例 会
6月 3日	ファミリーハイキング : 石割山(雨天により中止)
6月 3日	相山協 市民ハイキング 役員参加者 松田・桑田・寺田
6月10日	相山協 岩登り講習会 三ツ峠 参加者 佐藤・内山・中川
7月 7日	7 月 定 例 会
7月15日	山 小 屋 建 設 作 業 参加者 倉地・江成・佐藤・川島・榎田・平田
7月22日	山 小 屋 建 設 作 業 参加者 倉地・江成・佐藤・川島・榎田・平田

7月28日～8月1日	夏合宿 東北 朝日連峰 参加者 斎藤・近野・平田・諏訪部千秋・萩原
8月 4日	8 月 定 例 会
8月 4日～5日	相山協 市民富士登山 役員参加者 桑田・小野・佐藤
8月 4日～9日	夏合宿 南アルプス 荒川三山縦走 参加者 小沢・川島・二瓶
8月 7日～20日	南アルプス全山縦走 参加者 小野・松田
8月18日～19日	キャンプ 山小屋建設地
8月27日～29日	白馬三山・鍾温泉 参加者 倉地・榎田
9月 8日	9 月 定 例 会
10月 6日	10 月 定 例 会
10月13日～14日	お月見山行 三ツ峠 参加者 倉地・江成・小沢・佐藤・田中・榎田・川島 松田・平田
11月 2日～4日	巻機山 参加者 倉地・小宮・榎田
11月10日	11 月 定 例 会
12月 1日	12 月 定 例 会
12月 7日	相山協 忘年会 （相模原 梅本寿し）
12月 8日	忘年会 津久井 両国橋のたもとの家 参加者 田中・倉地・二瓶・佐藤・諏訪部・榎田・小沢 平田・内山
12月30日～1月3日	正月合宿 南アルプス 北沢ベース 参加者 佐藤・二瓶・平田
1月12日	1 月 定 例 会
2月 2日	2 月 定 例 会

2月17日	スキーツアー 車山スキー場 参加者 諏訪部（信一・千秋・梓・茜）・宮地・小宮 佐藤・二瓶・内山・小沢・川島・寺田・榎田
3月 2日	3 月 定 例 会
4月 4日	臨時役員会

昭 和 5 9 年 度 会 計 報 告

昭和60年4月7日

収 入	金 額	備 考
前年度繰り越し金	242,860	
会 費	218,100	
入 会 金	2,000	富樫、秋山、寺田、宮崎
合 計	462,960	

支 出	金 額	備 考
事務・通信費	43,820	切手代、封筒代、コピー代、その他
装 備 費	35,780	ザイル
山 岳 協 会	56,000	会費、カレンダー代
慶 弔 費	50,000	近野、秋山（結婚祝い）その他
山ぐつ発行費	120,800	
山小屋製作費	29,470	材料費、その他
合 計	35,870	

収 入 ￥462,960. -

支 出 ￥335,870. -

繰り越し金 ￥127,090. -

以上報告いたします。

会計 泉 篤 志
会長 諏訪部 信 一

昭和60年度OB会役員一覧

[illegible]

SWVOB会 会員住所録

6801諏訪部信一

6902倉地哲郎

6903萩原 進

7101嶋崎三郎

7102諏訪部千秋

7202新津正巳

7301泉 篤志

7302宮崎貞子

7305井上富美子

7401斎藤正雄

7403江成利一

7406秋山 徹

7407泉 桂伊子

7601小沢 聡

7604悪原義範

7701河本宏美

7702小宮 豊

7703増田義昭

7704平田 恵

7801児玉陽一

7802佐藤 通

7803田中広志

7901榎田一典

7902川島菊夫

7903島野茂樹

7904小林輝明

7905沢井浩樹

8001桑田菊美

8002松田英一郎

8003中川雅代

8004小野文男

8102太谷 裕

8103斎藤正史

8105中里由樹

8106二瓶 祥

8201石井賢司

8202稲石幸次

8203黒川智弘

8204堀水浩司

8205増田克彦

8206横沢秀和

8207平本 真

8301高野真一

8302宮崎伸一

8303森野誠治

8304山田 孝

8305秋山達也

8306富樫 勉

8401富樫直明

8402寺田義孝

6705松沢一憲

6809中里 進

6904渋谷恵子

7014練間節男

7211大熊敏子

7308井上 久

7408出頭義紀

編集後記

やまぐつ 16号も、やっと発行できるはこびとなり、ほっとしています。本来は五月発行とする予定が半年もおくれ申し分なく思います。

原稿の集まりが悪ういのが毎年のことですが、次号の編集責任者のために、今から用意して積極的に投稿してください。

P. S

阪神タイガース悲願の2年ぶり優勝の年です。バンザイ

「やまぐつ」第16号

発行 昭和六一年一月

発行責任 諏訪部信一

編集 小宮 豊

発行団体 S.W.V.O.B 会

印刷 ローゼン



